

企画展 「医学教育の曙からノーベル賞まで」

——名古屋大学創立七〇周年（創基一三八周年）記念——」

堀田 慎一郎

はじめに

一 開催決定までの経緯

二 準備作業の概略

三 展示内容とその特徴

(一) パネル展示

(二) 物品展示

(三) 映像・動画コーナー

(四) ハンズオン資料

むすびにかえて

はじめに

本稿は、企画展「医学教育の曙からノーベル賞まで―名古屋大学創立七〇周年（創基一三八周年）記念―」について、その内容、および企画から終了までの経緯を紹介するものである。

企画展「医学教育の曙からノーベル賞まで」（以下、「本企画展」と略）は、第一九回名古屋大学博物館企画展として、二〇〇九（平成二一）年一〇月一七日（土）から同年一二月二六日（土）を会期に、名古屋大学博物館において開催された（展示時間は一〇時～一六時、日曜日・月曜日は休館）。名古屋大学文書資料室と名古屋大学博物館の共催によるものである。

詳しくは本文で述べるが、本企画展は、名古屋大学の歴史を通史的に紹介する本格的な展示会としては初めてのものであった。しかも、名古屋大学の歴史に関する常設展を設けるにあたっての、準備展示でもあった。

このように、本企画展は大学文書資料室のみならず、名古屋大学全体にとっても画期的な意義を持つものである。その展示記録を残すことは、大学における当該大学の歴史の常設展、あるいはそれと大学アーカイブズとの関わりの一事例として、学内・学外を問わず裨益するところがあろう。

一 開催決定までの経緯

名古屋大学大学文書資料室（以下、「資料室」と略）は、名古屋大学の歴史に関わる資料を収集・保存・公開するとともに、名古屋大学の歴史を広く学内・学外に普及するため、それらの資料を「活用」することを、「名古屋大学大学文書資料室規程」に掲げている。資料室では、この方針にしたがって、これまでもさまざまな展示活動を積極的にこなってきた。

ただ、それらの展示の多くは、ホームカミングデイや各種フォーラムなど、全学的なイベントの当日のみのものであった。それらは、通史的な内容を含んではいたが、主にキャンパスの歴史を中心とするものであり、しかも展示規模も大きくはなかった。また、一カ月から数カ月にわたる比較的長期の企画展も、二回おこなった経験があるが、それらは名古屋大学史における重要なテーマに特化した展示であり、通史的内容ではなかった。¹⁾

名古屋大学は、日本の基幹大学の一つであることを自負し、しかも前身諸学校を含めれば、日本の大学でも有数の長い歴史を持つている。それにもかかわらず、来学者や学内者に対してその歴史を分かりやすく紹介する常設展がないことは、資料室のみならず、名古屋大学の大きな課題であったといえる。²⁾

常設展が実現できないでいた最も大きな要因は、展示スペースの問題であった。こうした常設展は、大学のフロア的な場所になければ意義が半減してしまうが、そのようなスペースを確保することはそう簡単ではない。

大学のフロアにあり、なおかつ展示スペースが確保できそうな施設として、真っ先に挙げられるのは豊田講堂である。豊田講堂は、一九六〇（昭和三五）年に建設されて以来、名古屋大学のシンボリックな建物であり、大学の

歴史に関する常設展を設けるに、これほど適した場所はない。ただし豊田講堂は、とくに二〇〇七（平成一九）年一二月竣工の大きかりな改修・増築により、さまざまな目的に利用されることが想定され、固定的な常設展コーナーを設けることは難しい状況にあった。³⁾

もう一つは、名古屋大学博物館（以下、「博物館」と略）である。博物館も大学のフロントに位置し、しかもその常設展の中には、名古屋大学の歴史に関わるものも含まれている。ただ、同館も展示スペースが不足している状況であり、まとまった常設展スペースをこれ以上増やすことは難しかった。

そうしたなか、名古屋大学は二〇〇九年に創立七〇周年をむかえることになった。役員会の下に、名古屋大学創立七〇周年記念事業委員会（総長、常勤理事、副総長、各部長の長、教育研究評議会評議員、事務局各部長などからなる）が設置され、二〇〇九年一月一七日に名古屋大学創立七〇周年（創基一三八周年）記念式典（以下、「記念式典」と略）を挙行するほか、さまざまな関連事業をおこなうことになった。

そして、この創立七〇周年記念事業の一環として、名古屋大学の歴史に関する常設展示コーナーを設置することになった。従来の懸案であった展示スペースの確保の問題も、博物館の二階書庫および廊下約一五三㎡を展示室に改修することによって解決した。⁴⁾ 展示費用も、記念事業費に関わる総長裁量経費から支出されることになった。

最終的には、記念式典当日に博物館企画展としてオープンさせ、企画展終了後にこれを基盤にして常設展に移行することが決まった。

二 準備作業の概略

本企画展の内容について、本格的に検討をはじめたのは、二〇〇八年八月からであった。検討に参画したのは、博物館から西川輝昭館長、資料室から羽賀祥二室長、山口拓史室員、筆者の四人であった。以後、この「大学史展示ワーキンググループ」が、展示内容の大枠を決める場となった。^⑤

この段階では、常設展を設置することすら決まっておらず、むしろ役員会から展示プランを求められて検討がはじまった。そして同月、大学史展示WGで展示の素案を作成し、役員会に提出した。素案ではあつたが、のちに実際に採用された展示の基本的な構成の多くはすでに盛り込まれていた。

もつとも、本格的に展示の準備作業に着手したのは、博物館の改修工事の実施が決定し、創立七〇周年記念事業予算の枠組みもほぼ定まつて、本企画展が記念事業の一環として開催されることが確実となつた二〇〇九年一月からであった。^⑥以後、大学史展示WGで検討を重ね、三月には展示内容の方針・骨子がほぼ固まつた。

展示方法は、学術的な調査を前提としながらも、研究者でなくても展示内容を十分に理解できるようにすることを重視した。これは本企画展が、名古屋大学の歴史を社会に広く普及することを目的としているからにはかならない。そのため、文章を極力少なくすると同時に、物品資料は一点一点の価値や面白さを重視して展示し、ストーリー性については、主に写真や図表による展示パネルによつて担保することにした。ただし、物品資料の原物を展示することは、期間を限定してならともかく、常設展化を考えると適當ではない。とくに戦前期の資料は経年劣化がいちじるしく、細心の配慮が必要である。そこで、その後の常設展でも引き続き展示する可能性が高い資料について

は、予算が許す限り、精巧なレプリカを製作することにした。

そのほか、視聴覚機器を積極的に活用し、映像や動画による展示コーナーを設けること、さらに入場者が直接手に取って閲覧できるハンズオン展示にも力を入れることにした。

展示で扱う範囲は、常設展化を視野に入れて、名古屋大学の歴史を通史的に理解できるようにしつつも、創立七〇周年に即した名古屋帝国大学の創設に関わることで、創基一三八周年に即した愛知医学校（その後の愛知県立医学専門学校・愛知医科大学・名古屋医科大学時代も含む）に関わることの二つを特集することにした。さらに、歴史をふまえて、現在の名古屋大学についても理解できるコーナーを設けることになった。また、展示室が新しくはあるものの約一五三㎡と決して広くはないことに鑑み、前身学校である第八高等学校、名古屋高等商業学校、岡崎高等師範学校については、今回は本格的には取り扱わないことにした。^②

こうした大枠が決まったあとは、展示パネルや映像コンテンツの製作、展示物の選定などの具体的な作業に入った。展示パネルの製作は、第一コーナーは西川博物館長が担当し、それ以外は筆者が、中元崇智非常勤研究員（創立七〇周年記念事業担当）、今村直樹非常勤研究員（同担当）および田渕宗孝事務補佐員の協力を得て担当した。次章で紹介するスライドショーについては、筆者の監修の下、今村非常勤研究員が作業を担当した。これも次章で紹介するハンズオン資料については、羽賀室長と筆者の監修の下、田渕事務補佐員、李主先事務補佐員、中村史信事務補佐員をはじめとするスタッフが作業にあたった。

また、写真資料については、資料室において同時進行で進められていた、創立七〇周年記念図録^③の編集作業で収集された貴重な写真資料を積極的に活用した。

三 展示内容とその特徴

(一) パネル展示

展示パネル（A0版 \parallel 八四・二cm \times 一一八・九cm）の具体的内容については、全パネルを本稿に掲載したので、それをご覧いただきたい。

製作にあたっての方針は、前章で述べた通りである。戦前期を扱うパネルについては、どうしてもモノクロ写真が多くなりがちなので、カラーの絵図や図表などをできるだけ用いるようにした。

そして、今回のパネル展示の目玉として製作したのが、「名古屋大学の歴史年表」と「名古屋大学の歴史地図」であった（本稿に掲載）。

歴史年表は、名古屋大学創基一三八年の歴史を、幅三五〇cmの大パネルにまとめたものである。名古屋大学の本格的な歴史年表といえ、一九九一（平成三）年に刊行された写真集の巻末年表があるくらいで、一九九五年刊行の『名古屋大学五十年史』通史編では、編さんの結果をふまえた年表があらためて作成されることはなかった。そのため、最近の二〇年間のことを盛り込みつつ、それ以前の年代についても『名古屋大学五十年史』やその後の研究をふまえて作成された年表が求められていた。^①さらに今回、創立七〇年記念図録でも、各章の冒頭にそれぞれの時期の年表を大きく掲載した。こうして、正確な年表がある程度の時間と手間をかけて作成できたことは、創立七〇周年事業における成果の一つに数えられる。この年表パネルは、入場者の方々が思い思いの時代の箇所を足止めて観覧する場面が多く見られ、とくに好評を博した。

歴史地図は、名古屋大学および前身諸学校のキャンパスの変遷を、名古屋を中心とする地図や当時のキャンパスの写真等を用いて、これも幅二二四cmの大パネルで分かりやすく図示したものである。内容は、資料室の折りたたみ式パンフレット（Zカード）の歴史地図を増補して拡大したものが、大パネルの迫力は入場者の目を引いた。

（二）物品展示

次に物品展示であるが、これも全展示物の写真とリスト（キャプションおよび説明文）を本稿に掲載した。¹²

その原物の多くは、資料室と博物館に所蔵されているものである。資料室と博物館では、これまで名古屋大学の歴史に関わる物品資料の収集に努めてきたが、今回の展示でその成果の一端を世に問うことができたのは幸いであつた。展示ケースは、博物館が元々保有していたものに加え、展示室への改装費で新しいものを購入して、大小合わせて一四のケースを用意し、比較的多くの物品を展示することができた。

中でも、名古屋大学の創基に関わる明治初期の展示資料の多くは、資料室所蔵の柴田邵平関係資料から選んだ。柴田邵平は、愛知医学校の創立に関わつたのち、同医学校の教員になつた人物であり、その旧蔵資料からなる柴田邵平関係資料は、本学のみならず、東海地方、あるいは全国的レベルにおいてすら大変貴重な歴史資料群である。¹³

そして、会場の入口に展示して、本企画展のシンボリック存在になつたのが、二つの後藤新平自筆書掛軸である。これらは、後藤新平が愛知医学校長の時代に、同医学校教員の柴田邵平に自作の漢詩を揮毫して贈つたものである。これらの掛軸については、資料室はすでに以前からその存在を把握しており、「ちよつと名大史」でも取り上げた。¹⁴ 本企画展は、全体としての展示内容の充実度には自負するものがあつたが、話題性のある、一つだけで人を引きつけるインパクトのある展示物があればこの上なかつた。そこで、一九三cm×六五cmと一七五cm×四二cmとい

う寸法を持つこれらの掛軸に白羽の矢を立てた。しかし、これらを常設展で展示するには、セキュリティの問題もあり、原物のままというわけにはいかない。そこで、これもレプリカを作成し、展示台を特注して展示することにした。⁽¹⁵⁾

そのほか、数点の名古屋帝国大学時代の行政文書を展示した。これらは、レプリカではなく原物である。比較的多くの文書が残っているため、常設展になっても短期間で展示物を入れ替えることができるので、あえて原物を用いた。分厚い簿冊が多いため、内容を見せることが難しいという欠点はあるが、こうした七〇年前の創立期の行政文書を資料室が所蔵し、申請さえすれば閲覧も可能であると示すことは、⁽¹⁶⁾大学アーカイブズの普及の観点からも意義は大きい。

また、一九六〇年前後の名古屋大学の学生生活を物語る物品を、二つの展示ケースに集めた（本稿展示リストにおける展示ケース13と14）。多くは印刷物やピラなどであるが、こうした資料は、不特定多数に配布されたものであるがゆえに、かえって体系的な収集がなされず、意外に後世に残りにくいものである。⁽¹⁷⁾ 今回の展示物は、この年代の文学部卒業生の一人から資料室が寄贈を受けた資料を用いたが、こうした資料をさらに収集する必要がある。

(三) 映像・動画コーナー

パネルや物品といった、静止している展示の制約・単調さを克服するため、映像や動画のコンテンツを用意することは、最近の展示活動においては有効な手段である。本企画展では、次の四つの映像・動画をモニターで上映した。モニターはいずれも小型であり、とくに①は、本来なら大画面で上映したいところだったが、モニターの準備や会場の広さの制約でやむをえなかった。

- ① 「名古屋大学のあゆみ―キャンパスの変遷―」（フラッシュ、資料室製作）
- ② 「名古屋大学豊田講堂 一九六〇―二〇〇五」（DVD、資料室製作）
- ③ 「名古屋大学プロフィールDVD」（DVD、広報室製作）
- ④ 「名大の授業」（DVD、オープンコースウェア委員会製作）

①は、本企画展のオープンに合わせて初上映したスライドショーであり、費用的にも時間的にも、最も力を入れた企画の一つといえる。

すでに資料室では、二〇〇五年度の総長裁量経費を得て、この「名古屋大学のあゆみ」を製作していた。これは、名古屋大学やその前身諸学校のキャンパスの歴史を、写真やコンピュータグラフィックス等を用いながら紹介したもので、第一部「名大キャンパスの変遷」（一〇分）、第二部「東山キャンパスの発展」（一五分）からなっていた。このスライドショーは、名古屋大学の各種イベントや、名古屋大学の歴史に関わる講義や講習などに広く活用しているが、最も古い歴史を持つ鶴舞キャンパスを特集したコンテンツがないことが大きな課題であった。

そして今回、本企画展の経費（創立七〇周年記念事業の総長裁量経費）の中に、鶴舞キャンパス編を製作する費用を確保することができた。これによって製作されたのが、第三部「鶴舞キャンパスの発展」（二五分）である。また第二部においても、東山キャンパスの現状に合わせ、二〇〇五年以降に建設された建物の紹介などを増補した。シナリオの作成や使用する写真の選定を資料室がおこなったうえで、これを業者がフラッシュによるスライドショーに仕上げる形をとった。

この第三部は、名古屋大学医学部が所在する鶴舞キャンパスの歴史を、前身校時代をふくめて概観したものであ

る。キャンパス内の建物配置や敷地の変遷、戦災からの復興過程、最新の建物などを分かりやすく解説している。また、鶴舞移転前の天王崎（現在の名古屋市中区栄一丁目）の校舎や、建設途中の鶴舞校舎など、近年見つかった写真も積極的に盛り込んだ。

まだ大幸や豊川のキャンパスは残っているものの、総説編と主要キャンパスである東山編と鶴舞編がそろったことにより、スライドショー「名古屋大学のあゆみキャンパスの変遷―」は一応の完成をみたといえる。

②も、資料室が製作したスライドショーである。これは、二〇〇五年の第一回名古屋大学ホームカミングデイにおける企画展「豊田講堂 一九六〇―二〇〇五」(資料室主催)で初上映したもので、「豊田講堂のプロフィール」(五分)、「豊田講堂の建設寄付」(八分)、「建築物としての豊田講堂」(六分)からなっている。本来は、二〇〇七年一二月に竣工した、豊田講堂の大規模な改修・増築工事のことを盛り込んで増補したかったが、予算と時間の関係で他日を期することとし、①の第二部の増補で少しふれるにとどめた。⁽¹⁸⁾

③は、創立七〇周年記念事業の一環として名古屋大学が製作した広報用のDVD(二七分)であり、名古屋大学の歴史を簡単にふまえたうえで、現状が手際よくまとめられている。⁽¹⁹⁾ また④は、名古屋大学の代表的な教員が、自らの講義について図や写真をまじえながらそれぞれ一分間程度で説明するものである。⁽²⁰⁾

(四) ハンズオン資料

一般に、展示物(物品やパネルなど)をどのように、あるいはどの部分を見せるかという選択は、展示する側に委ねられている。その意味で、ハンズオン資料による展示は、観覧する側が選択肢を持つことができる貴重な機会を提供するものであり、これを上手く使うことの意義は小さくない。

本企画展では、このハンズオン資料の充実にも力を入れた。実際に、ハンズオンコーナー等で展示したものは、
①「名古屋大学 Who's Who?」、②「名大祭の五十年」、③体育会・文化サークル紹介、④『我等の学園』、の四つである。

この中で、最も人員と時間を投入したのは①である。①は、名古屋大学の歴史の中で重要な役割を果たした人物、あるいは名古屋大学を卒業・修了した後、に学界や社会で大きな事績を残した人物などをピックアップし、一人あたり決まった様式のA4用紙一枚で紹介するものである。顔写真は必ず掲載し、そのほかの写真も積極的に載せるようにした。用紙はラミネートフィルム処理し、閲覧しやすいように配慮した。

大学の歴史を、人物を通じて紹介する場合に難しいのは、やはり取り上げる人物の選定である。誰もが異論のないような人物だけなら無難であるが、それでは範囲が限られ、いつまでも同じ人物の紹介を繰り返すことになりかねない。⁽²¹⁾

そこでこの企画は、名大史上の人物データを蓄積していく長期的な事業の一環として位置づけることにした。したがって、本企画展の終了時において取り上げられている四四人が、名大史を最も代表する人物であるというわけでは必ずしもなく、これからも定期的に少しずつ人数を増やしていく予定である。⁽²²⁾ こうして、言うなれば「名大史人物データベース」を完成に近づけていこうというのが、本企画の意図といえる。⁽²³⁾

②は、昨年までの全五〇回の名大祭パンフレットのコピーである。⁽²⁴⁾ それぞれの回の、表紙と興味深い一ページをA4用紙の表と裏に印刷し、やはり一枚ずつラミネートフィルム処理をした。これにより、各年代の名大祭の雰囲気を実感したり、懐かしんだりすることができる。同時に、世代を超えて五〇年間の変遷を理解することができる。これについても、年々増補していく予定である。

③は、体育会と文化サークル連盟のご協力の下、部やサークルにそれぞれA4用紙一枚で写真を入りの紹介記事を書いてもらい、これをラミネートフィルム処理したものである。これについては、決まったフォーマットを定めなかったことなど、コンセプトが今一つ明確でなかったこともあり、必ずしも十分な数が集まらず、反省すべき点が多かった。④は、名古屋帝国大学初代総長の渋沢元治が、学生と鍋などを囲みながら交流をはかる「総長懇談会」で配布した小冊子を、写真撮影により簡易複製したものである。

むすびにかえて

以上のような本企画展は、会期中に四九二〇人の入場者を得て、好評のうちに幕を閉じた。とくに一〇月二四日のホームカミングデイでは、一日で一二〇人も入場者があり、その成功に大きく貢献した。ただ、オープン日の一〇月一七日は、創立七〇周年記念式典に約一〇〇〇人も出席者があつたにもかかわらず、悪天候に加えて出席者への周知が不十分であつたためか、入場者が少なかったのは大変残念である。

また、本企画展の連動企画として、会期中に四回の博物館特別講演会がおこなわれた。⁽²⁵⁾さらに、S M B C (三井住友銀行) パーク栄からセミナー講演の依頼を受け、羽賀祥二室長と堀田慎一郎室員が、会期中に名古屋大学の歴史について講演した。

そして、本企画展の好評をうけて、会期終了後の二〇二〇(平成三二)年一月二四日(木)の全学同窓会関東支部新年交流会会場(会場は学士会館)において、その一部を移設して展示した。

前述のように本企画展は、その内容を選択・改編して、同じ博物館において来年度から常設展となることが内定している。予定されている展示スペースは、博物館の玄関を入つてすぐの場所にあり、入館者が必ずそこを通る絶好の位置にある。ただ、本企画展よりも規模は縮小して展示せざるをえず、前身諸学校をふくめた名古屋大学の歴史を概観するに十分とはとてもいえない。依然として課題は多いといえる。

本企画展は、常設展の準備展示という位置づけを与えられてはいるものの、あくまでも企画展として開催されたものである。実際に常設展として展示する段になれば、あらためて諸問題が現われてくることになるだろう。それらについては、また稿をあらためて論じたいと思う。



名古屋大学博物館①



名古屋大学博物館②



展示室の様子①



展示室の様子②



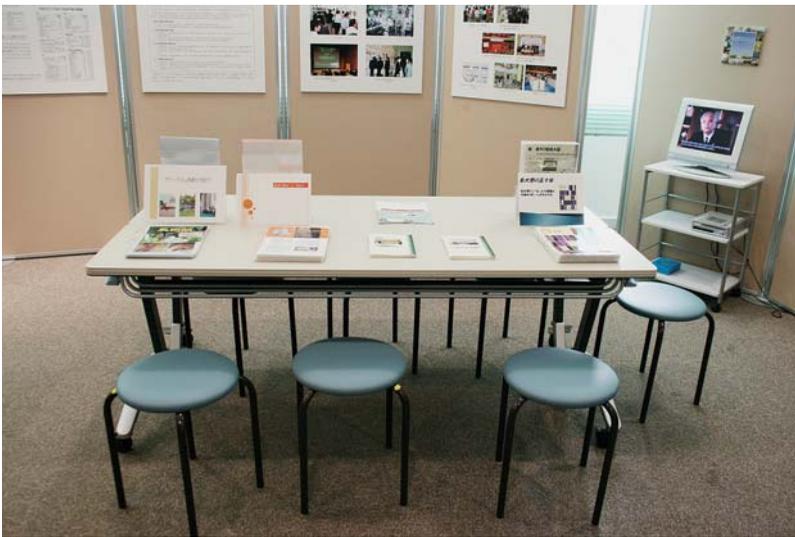
展示室の様子③



展示室の様子④



展示室の様子⑤



展示室の様子⑥



展示室の様子⑦



展示室の様子⑧

一名古屋大学創立70周年（創基138周年）記念—
**医学教育の曙から
ノーベル賞まで**

名古屋大学は、本年度で創立70周年・創基138周年を迎えました。名古屋帝国大学として1939年（昭和14）に創立されてから70年、医学部の前身にあたる名古屋県仮病院・仮医学校が1871年（明治4）に設置されてから138年です。

これを記念する今回の展示では、明治維新後の西洋医学を普及する事業の東海地方における中心となった明治の初めから医科大学となるまで、そして名古屋帝国大学の創立をへて、相次いで関係者がノーベル賞を受賞した現在までの歴史を、写真パネルや実物資料（一部はレプリカ）、映像資料などを使って分かりやすく概観します。とくに創基の時代については、初公開の貴重な資料を展示します。

激動の時代に創立され、現在の総合大学としての地位を築くに至った名古屋大学の歴史と現状を、ぜひ展示会場で体感してみてください。

2009年10月

源流—「河の学校」から鶴舞へ

今から138年前の1871年（明治4）、名古屋県は旧藩の評定所・奉行所跡に仮病院・仮医学校を設置しました。これが本学医学部の源流にあたり、本学ではこれを創基の年と位置づけています。

紆余曲折をへて、天王崎の地に落ち着いた愛知医学校・愛知病院は、東海地方に西洋医学や西洋医学教育を普及させる事業の中心となり、存続の危機を乗り越えて日本屈指の医学専門学校に成長しました。同時に、和洋折衷の特徴的な建物と堀川河岸にあったことから、「河の学校」と呼ばれるなど、人びとに親しまれました。

1914年（大正3）に現在も医学部のある鶴舞に移転したのち、20年に県立医科大学、31年（昭和6）に官立医科大学へと発展を遂げると、総合大学への夢を実現しようとの機運がいよいよ高まっていったのです。

名古屋県仮病院・仮医学校の設置 —名大の創基—



イシカワケンゾウ
伊藤錦窠(圭介)校刊『暎咭喇国種痘奇書』(天保12=1841年)
名古屋市蓬左文庫所蔵

尾張洋学の中心人物である伊藤圭介は、英語原本の漢訳本を和訳し、種痘の啓発・普及に努めました。嘉永5年(1852)には、新設された尾張藩種痘所の主任、のちに頭取となりました。



上田仲敏「西洋確術便覧」(嘉永6=1853年)
名古屋市東山植物園伊藤圭介記念堂所蔵

著者の上田仲敏は、尾張藩の洋学館などで伊藤圭介らとともに尾張への洋学の普及に努めました。この著書は洋学館で使われたと言われています。



愛知県名古屋明細図(1877年) 名古屋市蓬左文庫所蔵
左下の堀川東側河岸に愛知県公立病院が見られます。



名古屋県仮病院開業の布告(1871年)
愛知県公文書館所蔵

伊藤圭介らの建議をうけ、名古屋県が1871年(明治4)8月9日付で仮病院・仮医学校を設置しました。

〔読み下し文〕

八月八日(旧暦)
一 左安通御布告

今般当県、元評定所二仮病

院を取り建、明九日開業いたし

候間、疾病之者は士族卒を

始め農商に至る迄、普く治療を

請け候、様致すべき事。

但し規則等之儀は、同所へ

承合すべし事。尤も他管下之者に

ても治療を請け候儀は苦しからず

候事。

(平八) 八月 名古屋県

※かな文字は、ひらがなに統一しました。

※ルビ句読点および「」はバネル作

成者による補記です。

西洋医学の普及



ヨングハンスの植皮手術を描いた錦絵 (1875年)
順天堂大学所蔵

1874年(明治7)9月、愛知県病院の外国人教師ヨングハンスは、日本初の兄弟間同種植皮手術をおこなって世間を驚かせ、その手術の様子が錦絵になりました。ただし、医学的にはこれが成功した可能性はないようです。

科	主任	助主任	教授	講師	助教授	助教	主任技師	技師	主任医員	医員	主任看護婦	看護婦	主任事務員	事務員	主任庶務員	庶務員	主任清掃員	清掃員
内科	ローレル
外科
産科
小児科
皮膚科
泌尿科
眼科
耳鼻科
歯科
薬剤科
理学療法科
看護科
事務科
清掃科

愛知県公立病院・公立医学学校の学科表 (1879年)

一番下の教員欄に老烈(ローレル)の名前も見えます。



愛知県公立病院外科手術の図 (柴田芳洲画、1880年頃)
名古屋大学附属図書館医学部分館所蔵

愛知県公立病院の外国人教師ローレルが描かせたものです。左端がローレル、中央で執刀しているのが後藤新平であると言われています。手術風景の絵図としても、大変珍しいものです。



←後藤新平(左)とローレル(右) 奥州市立後藤新平記念館所蔵

実際のローレルの風貌は、手術の図とはかなり異なっています。

「河の学校」—天王崎時代—(1)

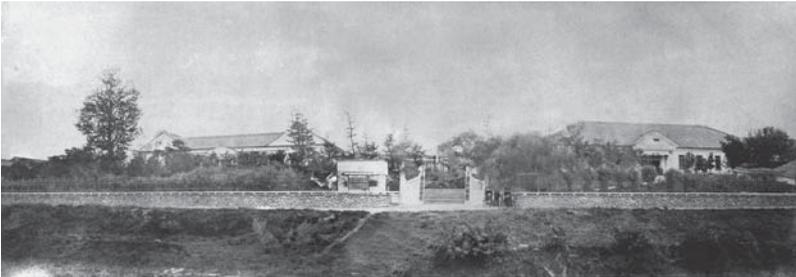


愛知医学校校舎

本体は洋風、屋根は和風の、和洋折衷の建築物になっています。

←天王崎の愛知県公立病院・公立医学校見取図 (1880年頃)

1877年(明治10)に西本願寺から移転し、この時初めて、新築の医療・医療教育の専門施設を持つことができました。



堀川から見た1884年(明治17)頃の愛知医学校・愛知病院全景(天王崎) 一部画像修正

現在のトーエネック(株)本社近辺(名古屋市中区栄1丁目)にあたります。



県知事が、愛知医学校・愛知病院の払い下げ請願を却下したことを報じる
『新愛知』(現在の中日新聞、1891年3月24日)

医学校生徒、名古屋の開業医、県会議員などによる反対運動が盛り上がり、地方新聞の多くも浄土真宗三派への払い下げ反対の論陣を張りました。

「河の学校」—天王崎時代—(2)



愛知医学校の学生たち(制服姿)



濃尾大地震(1891年)で負傷者の治療にあたる愛知病院
〔風俗画報〕第36号、1891年12月)

1891年(明治24)10月28日に起こった、岐阜県本巣郡根尾村(現在の本巣市)を震源とするM8と推定される直下型地震によって、愛知県だけでも約2,400人の死者が出ました。



愛知県立医学専門学校の授業風景(病理組織実習)



上の絵が掲載された
『風俗画報』の表紙→



愛知病院の外科手術
(天王崎時代)→

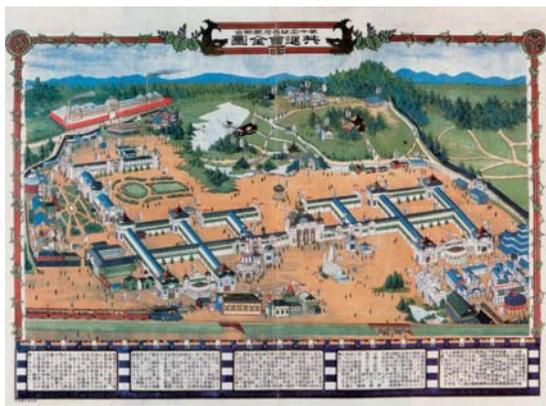
天王崎から鶴舞へ



鶴舞移転当時の愛知医学専門学校・愛知病院
鶴舞公園の竜ヶ池から撮影したものです。



新築落成記念式(1915年11月)で愛知医専正門
前に架けられた緑門



第10回関西府県連合共進会全国(1910年)
名古屋市市政資料館所蔵

1909年(明治42)、大半が田圃であった土地を名古屋市
が埋め立て、鶴舞公園を開園しました。その翌年、ここで
名古屋開府300周年を記念して大規模な産業博覧会が
開催され、3ヶ月の会期に約260万人が来場しました。



愛知医科大学昇格記念展覧会当日、校門の前
に並ぶ人々(1920年)



昇格記念展覧会の展示(眼科室)

鶴舞の医科大学



齋藤眞教授(外科)の臨床講義(名古屋医科大学)

齋藤眞は、日本の脳神経外科のパイオニアとして、大きな足跡を残しました。

「大阪朝日新聞」(1936年2月15日)→
朝日新聞名古屋本社提供

名古屋医科大学は、レントゲン施設が
充実していることで有名でした。



名古屋医科大学全景



名古屋医科大学付近



名古屋医科大学の図書館



愛知医科大学附属医院薬局投薬口

名古屋市は、「大名古屋」のスローガンの下、発展・膨張を
続け、1934年(昭和9)には人口が100万人を突破しま
した。鶴舞は市街地化が進んだ地域でした。

創立一名帝大けふ誕生

1939年(昭和14)4月1日、ついに名古屋、愛知、東海の人びとの長年の悲願である名古屋帝国大学が誕生しました。その創設費9百万円は、愛知県が全額負担しました。県の財政規模が4千5百万円の時代です。東山の広大な敷地も、地元の土地整理組合から無償で提供されました。

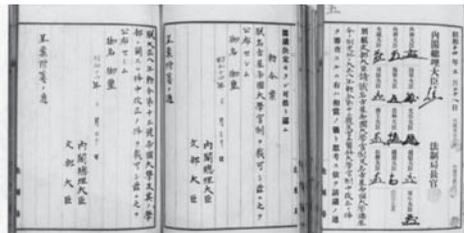
しかし、すでに2年前から日中戦争がはじまっており、名帝大の出発は多難でした。医学部と理工学部のみでの出発を余儀なくされ、建物も物資の不足で立派なものは難しく、ほとんどが突貫工事の木造でした。それでも、渋沢元治総長を中心に、学部増設の模索や東山のキャンパス構想の立案など、真の総合大学としての未来像が育まれていました。

そして1945年、名帝大は空襲によって鶴舞地区や西二葉地区の多くの焼失し、大きなダメージを負ったまま、新しい時代を迎えることになったのです。

名古屋帝国大学の誕生



名古屋帝国大学の誕生を報じる新聞記事（大阪朝日新聞、1939.4.2付夕刊）
朝日新聞名古屋本社提供



名古屋帝国大学官制勅令案 国立公文書館所蔵



名古屋帝国大学本部仮庁舎と理工学部学生

創立当初の本部は、当時の名古屋市東区西二葉町（現在の県立明和高校付近）に置かれました。1944年（昭和19）の末に東山地区へ移転しています。



総長室の渋沢元治総長

渋沢元治初代総長は、聖徳太子の十七条憲法の一節「和を以て貴しと為す」を、大学全体の座右の銘として総長室に掲げました。近衛文麿前首相の揮毫によるものです。

初期の大学生活



大学が空家を借り入れた菁々寮で開かれた「総長懇談会」
1942年(昭和17)からたびたび開かれ、総長のポケットマネーで豚鍋などを食べながら、教員と学生の意思疎通をはかりました。



附属医学専門部の学生と陸軍歩兵第6連隊(名古屋)の将兵

附属医学専門部は、軍医の養成を目的として1939年に設置されました。1944年に設置された医学部附属病院院(現在の名古屋市中区栄4丁目)は、専門部専用の診療病院となりました。



第1回阪大戦(昭和17年5月2日)

現在も毎年開催されている名阪戦(名古屋大学大阪大学対抗競技大会)は、1947年(昭和22)を第1回として始まっています。



揚輝荘衆善寮の留学生たち(戦時期)

松坂屋創業家第15代伊藤次郎左衛門の別荘である揚輝荘には、アジアからの留学生のための衆善寮がありました。写真には、名帝大の中国・タイ・モンゴルからの留学生と日本人学生などが写っています。



工学部電気学科の実験装置と学生たち(西二葉)



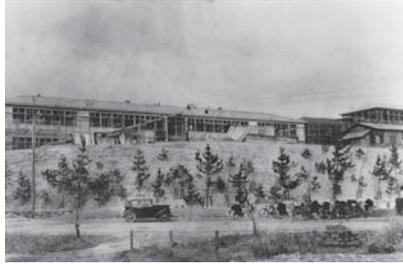
理工学部クラスメイト寸評(昭和17年卒業アルバム)

東山キャンパスの形成



工学部の校舎

戦時下の物資不足のため、突貫工事の木造校舎でした。上の写真は、四ッ谷通りをはさんだ理学部の側から撮影したものです。



建設中の理学部校舎（1942年）

現在の工学部8-9号館およびエコピア科学研究所先端技術共同研究施設のエリアにあたります。



←名古屋帝国大学要覽

開学記念絵はがき(1943年発行)の包み紙の裏地に印刷されていたもの。



整地中の理学部敷地



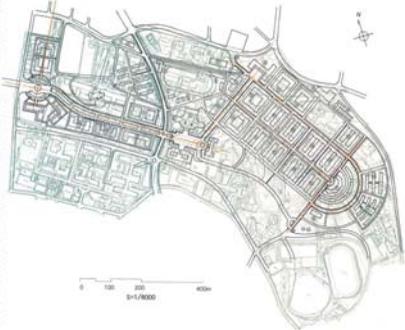
鏡ヶ池から見た理学部校舎(左)と工学部校舎(右)

東山キャンパス計画



名古屋帝国大学計画家（1942年）
東京都公文書館所蔵

区画	用途	面積	備考
1	学舎	10,000	
2	講堂	5,000	
3	図書館	3,000	
4	学生寮	15,000	
5	運動場	20,000	
6	校舎	8,000	
7	校舎	8,000	
8	校舎	8,000	
9	校舎	8,000	
10	校舎	8,000	
11	校舎	8,000	
12	校舎	8,000	
13	校舎	8,000	
14	校舎	8,000	
15	校舎	8,000	
16	校舎	8,000	
17	校舎	8,000	
18	校舎	8,000	
19	校舎	8,000	
20	校舎	8,000	
21	校舎	8,000	
22	校舎	8,000	
23	校舎	8,000	
24	校舎	8,000	
25	校舎	8,000	
26	校舎	8,000	
27	校舎	8,000	
28	校舎	8,000	
29	校舎	8,000	
30	校舎	8,000	
31	校舎	8,000	
32	校舎	8,000	
33	校舎	8,000	
34	校舎	8,000	
35	校舎	8,000	
36	校舎	8,000	
37	校舎	8,000	
38	校舎	8,000	
39	校舎	8,000	
40	校舎	8,000	
41	校舎	8,000	
42	校舎	8,000	
43	校舎	8,000	
44	校舎	8,000	
45	校舎	8,000	
46	校舎	8,000	
47	校舎	8,000	
48	校舎	8,000	
49	校舎	8,000	
50	校舎	8,000	
51	校舎	8,000	
52	校舎	8,000	
53	校舎	8,000	
54	校舎	8,000	
55	校舎	8,000	
56	校舎	8,000	
57	校舎	8,000	
58	校舎	8,000	
59	校舎	8,000	
60	校舎	8,000	
61	校舎	8,000	
62	校舎	8,000	
63	校舎	8,000	
64	校舎	8,000	
65	校舎	8,000	
66	校舎	8,000	
67	校舎	8,000	
68	校舎	8,000	
69	校舎	8,000	
70	校舎	8,000	
71	校舎	8,000	
72	校舎	8,000	
73	校舎	8,000	
74	校舎	8,000	
75	校舎	8,000	
76	校舎	8,000	
77	校舎	8,000	
78	校舎	8,000	
79	校舎	8,000	
80	校舎	8,000	
81	校舎	8,000	
82	校舎	8,000	
83	校舎	8,000	
84	校舎	8,000	
85	校舎	8,000	
86	校舎	8,000	
87	校舎	8,000	
88	校舎	8,000	
89	校舎	8,000	
90	校舎	8,000	
91	校舎	8,000	
92	校舎	8,000	
93	校舎	8,000	
94	校舎	8,000	
95	校舎	8,000	
96	校舎	8,000	
97	校舎	8,000	
98	校舎	8,000	
99	校舎	8,000	
100	校舎	8,000	



名古屋帝国大学計画家（1942年）分析図
木方十根氏・河野賢一氏作図

東側全域に、医学部を鶴舞から移転させる計画がありました。本部から中央街路が西へ伸び、キャンパス西端でロータリーとなって、ここに正門を設ける構想です。下の1947年の航空写真を見ますと、その構想の一部は実現されていたことが分かります。



名帝大キャンパス構想模型（1940～41年頃製作）

創立直後の名帝大が、東山キャンパスの将来構想を練るために島津製作所に発注して製作した、1/1000スケールの模型（高低差のみ1/100）です。現在、本部1号館の玄関に展示されています。



1947年の航空写真 国土交通省国土地理院所蔵

色が濃くなっている部分が当時の東山キャンパスです。現在の文系地区や博物館地区、運動場などの「山の上」地区は、まだ取得されていませんでした。鏡ヶ池も埋め立てられる前で、現在の2倍くらいの面積がありました。

戦時下の名帝大



開学記念式典（1943年5月1日）



一般公開された工学部水力実験室

この頃には、前年に工学部の第1回卒業生を送り出し、理学部の施設・設備も整備され、ようやく総合大学としての体裁が整いました。記念式典の際、数日にわたって工学部や理学部の施設が公開され、医学部では学術講演会や科学映画会が催されて、多くの市民が見学に訪れました。



在学中に応召した工学部学生を送る



名古屋帝国大学医学徒報国隊の診療風景

医学部関係者からなる報国隊が、無医村で診療奉仕をおこないました。



戦争遂行のために供出される医学部外堀の鉄柵
中日新聞社提供



防空演習でヘルメット姿の
医学部附属病院の看護婦
たち（43年頃）

空襲による被害



空襲直後の医学部1



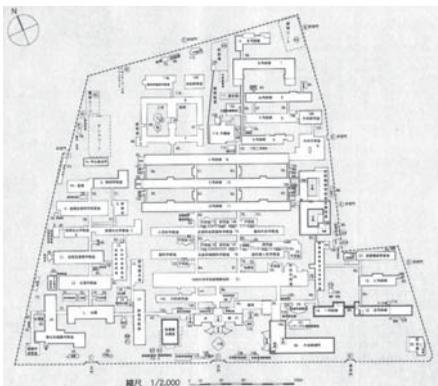
空襲直後の医学部2

1945年3月における三度の空襲で、医学部は図書館を除いてほぼ全焼、医学部附属病院も約半分の建物が焼失しました。また同年5月の空襲により、西二葉の工学部校舎や東山の大学本部事務室・学生集所・理学部生物学教室・航空医学研究所などが焼失しました。



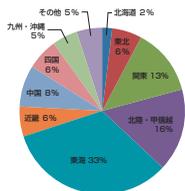
鶴舞キャンパス航空写真（1946年撮影）
国土交通省国土地理院所蔵

色が濃くなっている部分が当時の鶴舞キャンパスです。まだ復興が進んでおらず、空襲の被害がよく分かります。左の方が、とくに被害が大きかった医学部エリアです。

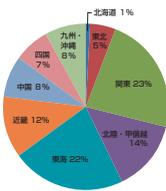


名古屋帝国大学医学部及附属病院配置図
木方十根氏作図

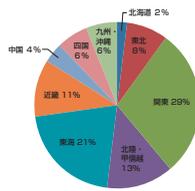
名古屋帝国大学学生の出身地の割合（1942年）



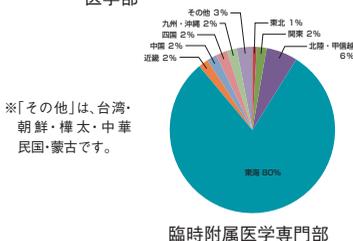
医学部



工学部



理学部



臨時附属医学専門部

※「その他」は、台湾・朝鮮・樺太・中華民国・蒙古です。

現在の名大(2009年度入学者の約75%)に比べると、東海(愛知・岐阜・三重・静岡)出身者の割合がかなり少ないことが分かります。逆に、医学専門部は8割が東海出身であり、地元の軍医養成を担っていたことが明らかです。

名古屋帝国大学の空襲被災状況

(昭和23年4月1日調)

部 局	被災月日 (昭和20年)	所在地 (すべて名古屋市内)	建物坪数		焼失率 (%)
			戦災前	焼失	
医学部	3月12日・19日	昭和区鶴舞町	3,818	3,711	97.2
附属医院	3月25日	同上	12,623	6,474	51.3
附属図書館	同上	同上	451	0	0
附属医院分院	3月19日	中区新栄町	1,135	47	4.1
本部	5月14日	千種区不老町	657	497	75.6
理学部	同上	同上	1,777	219	12.3
航空医学研究所	同上	同上	458	99	21.6
雇員宿舎	同上	同上	46	46	100
工学部	同上	東区西二葉町(仮校舎)	6,418	4,831	75.3
		および千種区不老町(1943年1月28日より移転中)			
学生宿舎	同上	東区長久葉町	0	0	0
官舎	5月17日	千種区松竹町	88	88	100
		昭和区広瀬町			
合計			27,472	16,012	58.3

戦災を受けなかった名古屋市の外周部・施設は除きます。

部局の名称は被災時点のものであります。

(「昭和二十年五月十四日空襲被害状況調」「昭和二十年五月十七日空襲被害状況調」「昭和二十年度文部省通達綴」および「昭和二十三年名古屋大学概況」より作成)

新制名古屋大学の出発

敗戦後の混乱のなか、名帝大の復興は大変な難事でした。空襲で焼失した校舎、戦時中の仮校舎の再建、本格的な総合大学となるための学部の増設や諸学校の包括、さらに新制大学への移行という、一つ一つですら大変な事業を、ほぼ同時に進めなければならなかったのです。地域から寄せられた支援は、その大きな力となりました。

そして、1949年（昭和24）5月31日、新制大学としての名古屋大学が設置されました。当初は各地にキャンパスが分散していましたが、それも1966年の農学部の東山移転によって学部の終結が完了し、60年に完成した豊田講堂を中心とする東山キャンパスの基礎がほぼできあがりました。

しかしこの時代は、1959年の伊勢湾台風による59～60年のいわゆる安保闘争、60年代後半の大学紛争と、本学が大きく揺れた時代でもあったのです。

分散するキャンパス



名城キャンパス（1960年当時） 中日新聞社提供

左の写真上部の旧陸軍歩兵第6連隊兵舎跡に、本部や附属図書館、文学部、教育学部、法学部などがありました。文学部3号館として使われていた建物は、犬山市の博物館明治村に移築されています。



旧第6連隊兵舎(旧文学部3号館) 博物館明治村提供



桜山キャンパス（1958年当時）

包括した名古屋高等商業学校の施設を引き継ぎ、経済学部と学生寮(櫻鳴寮)が置かれました。現在は、名古屋市立大学川澄キャンパスになっています。



安城キャンパス（1954年頃）

愛知学芸大学(現在の愛知教育大学)安城分校施設を引き継ぎました。現在は、安城市総合運動公園になっており、農学部同窓会による記念碑があります。



鶴舞キャンパス(1960年頃)

空襲によって多くの建物が焼失してしまった鶴舞地区ですが、医学部学友会などの支援を得ながら、急速に復興していきました。現在のキャンパスの形に比べると、北東部の一角がまだ取得されていません。

東山キャンパスの復興



1954年(昭和29)当時の東山キャンパス 中日新聞社提供



四ツ谷通3丁目交差点付近から見た工学部
(1953年頃)



「名古屋大学新聞」(1956年)



理学部化学科新制第4回卒業生(1956年)と「化学教室」の看板



理学部に保存されている、珍しい銅板
写真を現像したものです。当時の看板
も、理学部に保存されています。

豊田講堂の建設と 東山キャンパスへの集結



豊田講堂竣工記念パンフレット（1960年）



勝沼前総長・渋沢初代総長・松坂総長
（1961年）

講堂の建設は、渋沢総長の時代からの念願でした。第2代の田村総長は、新制移行の直前に現職のまま亡くなっています。



「名古屋大学要覧」（1960年度）

Jには「農学部」が入るべきところですが、安城市との関係で、あえて空欄にしているものと思われます。



7学部および教養部が集結した後の東山キャンパス（1970年）

東山移転前の教養部



瑞穂キャンパス(教養部)正門

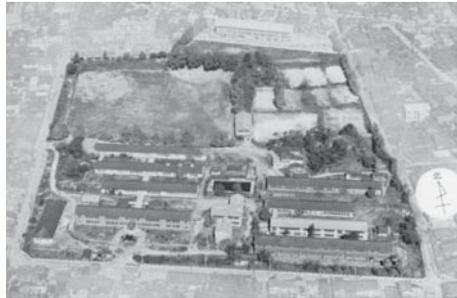


博物館明治村(犬山市)正門
博物館明治村提供

瑞穂キャンパスは、第八高等学校の施設を引き継いだものです。現在、その正門は、博物館明治村の正門として使用されています。



教養部の化学実験



1964年(昭和39)に東山へ移転する直前の瑞穂キャンパス
現在は、名古屋市立大学山の畑キャンパスになっています。



豊川分校(教養部)

当初の教養部は、瑞穂分校と、包括した岡崎高等師範学校の校舎(豊川分校)に分かれていました。



豊川の教養部学生たち(1951年)

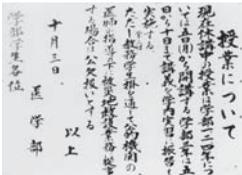
激動—揺れる名古屋大学—



名大祭仮装行列（1960年）



日米安保改定反対デモ（1960年度医学部卒業アルバムより）



伊勢湾台風後の医学部掲示（1959年）



救援物資を運ぶ学生たち



被災者救助活動

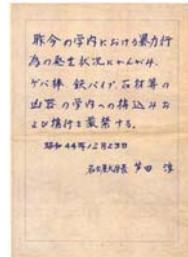
献身的な救援活動をおこなった名大の教職員と学生に対し、愛知県議会から感謝決議がなされました。



名大争論総決起集会



封鎖される教養部



当時の掲示



豊田講堂裏、本部前 中日新聞社提供

1967年(昭和42)のいわゆる医学部紛争に端を発した名大の大学紛争は、1969年には東山キャンパスにも本格的に波及しました。

初期の学生生活



「コンパ」(瑞穂キャンパス、1955年)



鶴舞の学生ホールで食事をする学生たち(1955年前後)



医学部の授業風景(1966年)



1964年(昭和39)に求學した湯川秀樹博士(前列左から2人目)と理学部物理学学科の学生たち

前列右から1人目の坂田昌一教授は、世界的に著名な物理学者であり、このたびノーベル賞を受賞した益川博士・小林博士の指導教官でした。



第10回名大祭(1969年)のパフレット表紙



石炭ストーブで暖をとる教育学部の学生たち(1963年頃)



東山キャンパス内の生協本部

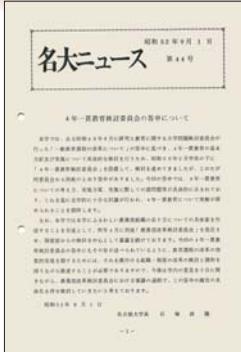
名古屋大学の発展

創立期、復興期の激動の時代をへて、本学は日本の基幹的総合大学として、さらに発展を続けました。

1970～80年代には、全学的な研究組織再編にともなって、現在につながるセンターが次々に設置されました。90年代に入ると、いわゆる大学院重点化により、学部が大学院中心の組織に改編されるとともに、独立大学院が相次いで設置されました。大学紛争後の大きな課題として、議論と改革が続けられた教養教育も、90年に入って教養部の廃止と4年一貫教育への移行という形で大きな節目を迎えました。

創立以来の「自由闊達」な学風に加えて、80年代からは留学生の受け入れが進み、国際色豊かな大学となっていきました。大学の景観も、学生生活も、ずいぶん様変わりしました。それでも、学生たちがそれぞれの夢を持って集まり、お互いに切磋琢磨し合っている場であることに変わりはありません。

教養教育の改革



「4年一貫教育検討委員会」の答申発表



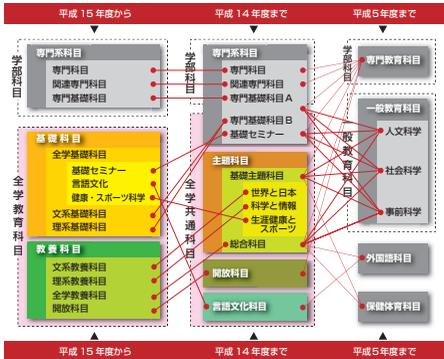
「研究と教育に関する大学問題検討委員会」(学長諮問組織)の動向を報じる「名古屋大学新聞」(1975年4月)



4年一貫教育の開始



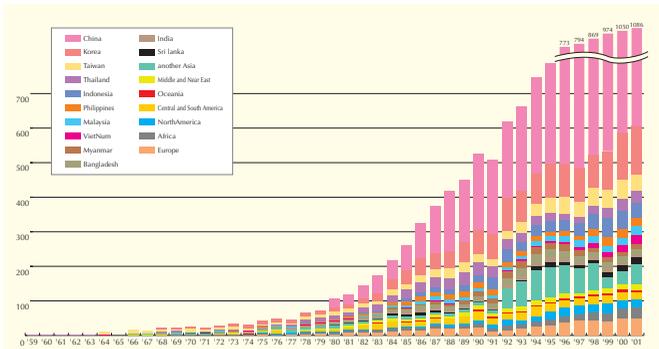
現在の全学教育棟(旧教養部)



全学教育科目の枠組みの変遷

4年一貫教育の理念を実現するさまざまな取り組みや検討がおこなわれたのち、1993年(平成5)には教養部を廃止し、その翌年から名実ともに4年一貫教育が始まりました。そして2001年(平成13)には、学内措置として教養教育院を設置しました。全学の協力教員により講義がおこなわれています。

国際色豊かな大学へ



名古屋大学の受け入れ留学生数(国・地域別)

戦後の名古屋大学による留学生受け入れは、長く微増もしくは横ばいの状態が続きましたが、日本がアジアの先進国としての地位を確立すると、1980年代から急増していきました。多くの国々から留学生を受け入れましたが、中心になっているのはアジア諸国、とりわけ中国と韓国で、この傾向は現在も変わっていません。現在では、1300人以上の留学生を受け入れており、これは全学生数の約8%という高い割合です。



インターナショナル・レジデンス
(国際交流会館、1982年竣工)



工学研究科の留学生特別コース開設
(1987年)



留学生懇親パーティー (1988年)



留学生センター (2001年竣工)



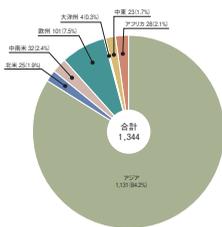
国際交流プログラム「スモールワールド・コーヒアワー」にて

留学生の受け入れと海外留学 (平成21年5月現在)

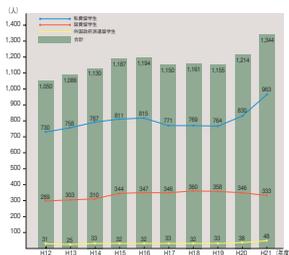
学びの場を世界に広げて
—海外留学する名大生—

留学先国(地域名)	受け入れ人数			在籍別人数		
	短期留学 外国人 留学生	長期留学 外国人 留学生	計	留学生	外国人 留学生	日本人 留学生
米 国	5	8	24	24	24	0
オーストラリア	1	16	21	13	6	0
英 国	2	7	41	6	7	0
ドイ ツ	3	5	12	11	1	0
フランス	3	2	11	7	4	0
カナダ	3	5	8	3	5	0
中 国	1	6	8	5	3	0
韓 国	1	4	5	5	0	0
イタリア	2	1	3	3	0	0
デンマーク		3	3	3	0	0
インドネシア		1	1	1	0	0
オーストリア		1	1	1	0	0
オランダ		1	1	1	0	0
カンボジア			1	1	0	0
ス イ ス			1	1	0	0
スウェーデン	1		1	1	0	0
セルビア		1	1	1	0	0
韓 国		1	1	1	0	0
チリ		1	1	1	0	0
メキシコ		1	1	1	0	0
トルコ	1		1	1	0	0
パキスタン		1	1	1	0	0
フィンランド		1	1	1	0	0
チリ		1	1	1	0	0
ペルー		1	1	1	0	0
ポーランド		1	1	1	0	0
マレーシア		1	1	1	0	0
計	17	20	146	73	73	0

注) 海外留学の種別・目的は、学位取得、交換留学、文楽のための演習、語学研修、インターンシップ等を指します。平成19年度以降は、平成20年度に引き続き継続するものを示します。



地域別の留学生数



留学生数のうつつかり

70以上の国・地域から1300人以上の留学生が学んでいます。
名大生も海外で学んでいます。

研究所・センターの設置 (～1990年)



プラズマ研究所 (1961年設置)
1989年に文部省核融合科学研究所に発展



環境医学研究所 (1946年設置)
写真は準無重量実験



空電研究所 (1949年設置)
現在、太陽地球環境研究所
写真はパラボラアンテナ



大型計算機センター (1971年設置)
現在、情報基盤センター



総合保健体育科学センター (1975年設置)
写真は、身体測定を受ける瀬古利彦選手



情報処理教育センター (1980年設置)
現在、情報基盤センター



アイトープ総合センター
(1976年設置)



水圏科学研究所 (1976年設置)
現在、地球水循環研究センター
写真はレーザーレーダー



先端技術研究センター (1988年設置)
現在、エコトピア科学研究所
写真はクリーンルーム



省資源エネルギー研究センター
(1982年設置)
現在、エコトピア科学研究所



年代測定資料研究センター (1990年設置)
現在、年代測定総合研究センター
写真はタンデロン加速器

大学院大学として



● 環境学研究所 (2001年設置)



● 多元数理科学研究所 (1995年設置)



1990年代以降、5つの独立研究所が創設され、さらに既存の8学部も、いわゆる大学院重点化により、2000年(平成12)までに、大学院を中心とする組織に改編されました。

- 文学研究科
- 教育発達科学研究科
- 法学研究科
- 経済学研究科
- 理学研究科
- 医学系研究所(鶴舞キャンパス)
- 工学研究科
- 生命農学研究科



● 情報科学研究科 (2003年設置)
人間情報学研究所 (1992~2003年)



● 国際開発研究所 (1991年設置)



● 国際言語文化研究科 (1998年設置)

学生生活からキャンパス・ライフへ



1968年(昭和43)頃

クラス
写真
(法)



2005年(平成17)



1970年(昭和45)頃

食堂
(文系)



2009年(平成21)



1979年(昭和54)年

生協
購買



2009年(平成21)



1967年(昭和42)頃

仮装
行列



2008年(平成20)

現在の景観へ



医学部附属病院新病棟 (1999年完成)



医学部保健学科東館 (2006年竣工、大幸キャンパス)



文系総合館 (2002年竣工)
1～2Fには、統合された文系事務部が
入っています。



変わらない景観もあります



IB電子情報館(2003年完成)と
地下鉄3番出口



野依記念物質科学研究館
(2003年竣工)



ファミリーマート名古屋大学店
(2006年オープン)



2007年竣工の改修により全面改装された
豊田講堂ホール



フォレスト(書店とカフェ)と
ダイニングフォレスト
旧理系食堂です。



「山上」グラウンド
(2005年にフィールドを人工芝化)



国際喫煙館 (2002年竣工、旧喫煙寮)

21世紀に羽ばたく名古屋大学

20世紀最後の年である2000年（平成12）、本学は学術憲章を制定し、21世紀に向けたその学術活動の基本理念を、全国の大学に先駆けてかかげました。2004年に国立大学法人となった本学では、学外の有識者の参画を得ながら、その実現に向けた積極的な取り組みを進めつつあります。

世界最先端の研究を推進し、「勇気ある知識人」を育成して、日本のみならず広く世界に貢献すること、これには教育研究体制の充実とともに、学外との積極的な連携が不可欠です。本学では、産学官の連携を強化するための施策、さらに世界の大学や企業との連携・交流を積極的に推し進めています。

また国立大学法人として、社会への説明責任を果たしつつ、みなさまとともに歩む大学をめざして、社会へのさまざまな貢献・連携事業をおこなっています。

国際社会とともに



国際学術コンソーシアム(AC21)の設立 (2002年)

AC (Academic Consortium) 21の本部は名古屋大学に置かれ、高等教育発展のための国際協力事業をおこなっています。



日本法教育研究センター(ベトナム)開所式 (2007年)

モンゴル、ウズベキスタン、カンボジアにも設置され、現地の大学と協力して、日本法および日本語の教育にあたっています。



第1回インターナショナル・アドバイザー・ボード (2006年)

International Advisory Board (国際諮問委員会) は、ノーベル賞受賞者3名を含む国内外の著名な学識経験者7名からなる総長の諮問機関です。



タイのチュラロン研究所およびチュラロン大学院大学との学術交流協定調印 (2008年)

43の国と地域との間で、78の大学および182の部局との学術交流協定、3つの産学連携に関する協定、5つの国際共同研究に関する協定を締結しています。



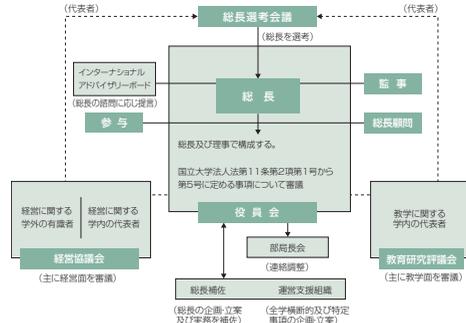
アジア諸国に広がる全学同窓会支部



全学同窓会北京支部の設立

国立大学法人名古屋大学

名古屋大学運営組織（2009年9月現在）



2004（平成16）4月1日から、名古屋大学は「国立大学法人」として再出発しました。これは、独自性を発揮できる一方、より大きな責任を負うことでもあります。また、運営組織も役員会を中心とするものに大きく変わり、学外の有識者も大学経営に参画するようになりました。

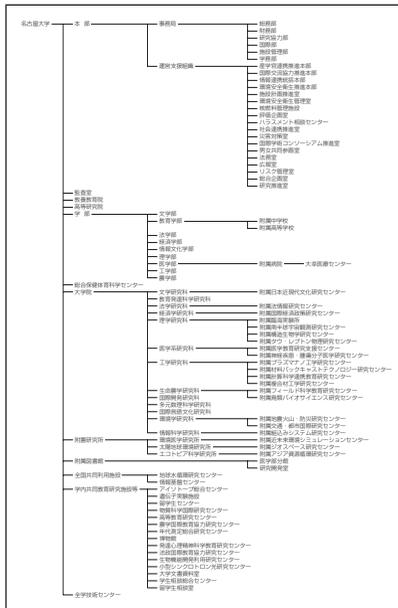


看板除幕セレモニー（2004年4月1日）



第1回経営協議会（2004年4月3日）

名古屋大学組織図（2009年6月現在）



世界の最先端を行く(1)



高等総合研究館(高等研究院)

高等研究院アカデミー会員

(五十名順)



赤崎 勇
平成21年 京都府
青色発光ダイオードの発明



浜島 遼明
平成15年 文化功労者
カーボンナノチューブの発見



小林 誠
平成23年 ノーベル物理学賞
第5: 量子コヒーレンスに関わる理論の提唱



佐藤 健一
平成14年 日本学士院賞
テラスト科学の創始



下村 健
平成25年 ノーベル化学賞
緑色蛍光タンパク質(GFP)
の発見



野崎 貞治
平成25年 ノーベル化学賞
不斉合成法の確立



桜川 敬文
平成25年 ノーベル物理学賞
第5: 量子コヒーレンスに関わる理論
の提唱

高等研究院は、全国の大学に先駆けて2002年(平成14)に創設された、部局を超えた研究専念組織です。名古屋大学が世界最高水準の研究活動を推進し、卓越した研究成果をあげ、さらにそれを社会に還元するため、学内の学術振興、とくに優れた研究への支援、将来の名古屋大学の中枢をにう若手研究者の自立支援などの諸活動をおこなっています。



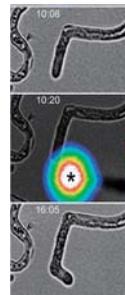
宇宙基礎原理の探求
—素粒子から太陽系、宇宙に至る包括的理解—
(グローバルCOE)



マイクロ・ナノメカトロニクス教育研究拠点
(グローバルCOE)



分子性機能物質科学の国際教育研究拠点形成
(グローバルCOE)



システム生命科学の展開: 生命機能の設計
(グローバルCOE)

世界の最先端を行く(2)

グローバルCOEプログラム採択拠点

平成19年度～平成23年度			
分野	拠点リーダー	所属・職名	拠点のプログラム名称
生命科学	近藤 孝男	大学院理学研究科 教授	システム生命科学の展開：生命機能の設計
化学、材料科学	渡辺 秀人	物質科学国際研究センター 教授	分子生機能物質科学の国際教育研究拠点形成
人文科学	佐藤 彰一	大学院文学研究科 教授	アクト・ホールの解釈学的研究と教育

平成20年度～平成24年度			
分野	拠点リーダー	所属・職名	拠点のプログラム名称
医学系	祖父江 元	大学院医学系研究科 教授	機能分子医学への神経疾患・腫瘍の統合拠点
数学、物理学、地球科学	杉山 直	大学院理学研究科 教授	宇宙基礎原理の探求 — 量子から大規模系、至る包括的展開 —
機械、土木、建築、その他工学	福田 敏男	大学院工学研究科 教授	マイクロ・ナノメカロクス教育研究拠点

平成21年度～平成25年度			
分野	拠点リーダー	所属・職名	拠点のプログラム名称
学際、複合、新領域	安成 哲三	地球化学環境研究センター 教授	地球学から臨床・環境学への展開

21世紀COEプログラム採択拠点

分野	拠点リーダー	所属・職名	拠点のプログラム名称
生命科学	町田 泰則	大学院理学研究科 教授	システム生命科学・分子生物学との統合
	水野 猛	大学院生命農学研究所 教授	未来世の食を担う植物バイオテクノロジー
化学、材料科学	関 一彦	物質科学国際研究センター 教授	物質科学の拠点形成・分子機能の解明と創発
	洗井 茂生	大学院工学研究科 教授	自然・工学材料プロセスングの創発
情報、電気・電子	菅井 秀郎	大学院工学研究科 教授	情報社会を拓く未来IT情報デバイス
	末永 康仁	大学院情報科学研究科 教授	社会情報基盤のための音声映像の知的統合
人文科学	佐藤 彰一	大学院文学研究科 教授	統合アクト・科学の構築

平成15年度

分野	拠点リーダー	所属・職名	拠点のプログラム名称
医学系	祖父江 元	大学院医学系研究科 教授	神経疾患・腫瘍の統合分子医学の拠点形成
数学、物理学、地球科学	福田 敏雄	大学院理学研究科 教授	宇宙・物質の起源：宇宙史の物質的発展
	安成 哲三	地球化学環境研究センター 教授	人間・地球・生命相互作用系の変動学
機械、土木、建築、その他工学	福田 敏男	大学院工学研究科 教授	情報社会を拓くマイクロナノメカロクス
学際・複合・新領域	山本 一良	大学院工学研究科 教授	同位体が拓く未来— 同位体科学の展開から応用まで—

平成16年度

分野	拠点リーダー	所属・職名	拠点のプログラム名称
基幹的学術	金田 行雄	大学院理学研究科 教授	解明科学のプロトタイプ

COEプログラム(Center Of Excellence Program)は、日本の大学に世界最高水準の研究拠点を形成するための文部科学省による補助金事業です。名大の採択件数は、21世紀COEプログラム(2002～04年度)では全国第4位、グローバルCOEプログラム(2006年度～)では全国第7位です。

名古屋大学の研究者が獲得した文部科学省科学研究費補助金は、全国屈指の額をほこっています。

大学教育支援プログラム(GP)

現代的教員ニーズ取組支援プログラム(現代GP)

採択拠点名称	取組担当部署	採択年度
プロジェクト型大卒論文流通せむの構築	法学部(共同) 主となる大学 名古屋大学	平成19年度

新たな社会人ニーズに対応した学生支援プログラム

採択拠点名称	取組担当部署	採択年度
講義の授業内容の刷新と大卒論文の構築	法学部	平成19年度

大学教育の国際化加速プログラム【長期海外留学支援】

採択拠点名称	取組担当部署	採択年度
名古屋大学長期留学支援プログラム	法学部	平成19年度
名古屋大学長期留学支援プログラム	法学部	平成20年度

【戦略的国際連携支援】

採択拠点名称	取組担当部署	採択年度
人新形成型の国際連携法教育推進の構築	大学院法学研究科	平成18年度

大学院教育改革支援プログラム

採択拠点名称	取組担当部署	採択年度
法學支援をデザインした専門系の構築	大学院法学研究科	平成18年度
国際競争力強化のための育成	大学院国際情報研究科	平成18年度
モバロに生活をたぐくむ物質科学教育	大学院工学研究科	平成19年度
学生プロジェクトを支援する環境科学教育	大学院多元環境科学研究科	平成19年度
最先端型知的統合的保健医療系の育成	大学院医学系研究科	平成19年度

大学病院連携型高度医療人養成推進事業

採択拠点名称	取組担当部署	採択年度
国際競争力強化型キャリア育成プログラム	医学部附属病院	平成20年度

がんプロフェッショナル養成プラン

採択拠点名称	取組担当部署	採択年度
国際競争力強化型キャリア育成プラン	大学院医学系研究科	平成19年度

産業連携による実践型人材育成事業—長期インターンシップ—プログラム開発

採択拠点名称	取組担当部署	採択年度
動物バイオテクノロジーを牽引する次世代の大学院生	大学院生命科学研究所	平成17年度
研究実践リーダーを育てる高度型実践教育	大学院工学研究科	平成18年度

先端のITスペシャリスト育成推進プログラム

採択拠点名称	取組担当部署	採択年度
ITとLによる最先端技術応用能力の涵養	大学院情報科学研究科	平成18年度
人材育成拠点の形成	(共同) 主となる大学 名古屋大学	平成18年度

財政状況(平成20年度予算決算額)

収入		支出	
区分	決算額	区分	決算額
運営費交付金	35,985	業務費	59,448
施設整備費補助金	4,295	教育研究経費	34,679
補助金等収入	1,791	給与費	23,759
国立大学等経費センター補助金交付金	89	設備費	5,288
自己収入	34,207	施設整備費	10,189
授業料・入学費・雑収入	9,197	補助金等	1,717
学費奨励金収入	24,277	学生奨励金収入(特別奨励金費等)	11,292
雑収入	735	長期借入金償還費	4,970
軍事学術等研究収入及び関係収入等	12,150	計	92,312
引当取崩	46		
長期借入金収入	5,842		
承継剰余金	11		
目的別立戻金	6		
計	94,373		

※ 特別奨励金費等収入については、国・地方自治体・関係センター・関係機関行事等に係る費用を示す。

21世紀COEプログラム		研究費補助金	
区分	件数	金額	金額
研究費補助金	1	121,950	121,950

グローバルCOEプログラム

区分	件数	金額
研究費補助金	6	1,823,072

注 二次校に対する分府補助金を除く。

研究費補助金		科学研究費補助金	
研究費補助金	金額	研究費補助金	金額
特別推進費	20	特別研究費	45,370
特別推進費	20	特別研究費	2,003,663
特別推進費	18	特別研究費	156,415
特別推進費	28	特別研究費	450,640
特別推進費	138	特別研究費	917,658
特別推進費	380	特別研究費	1,467,834
特別推進費	438	特別研究費	586,737
特別推進費	188	特別研究費	158,224
特別推進費	6	特別研究費	174,864
特別推進費	39	特別研究費	216,365
特別推進費	254	特別研究費	404,330
特別推進費	29	特別研究費	42,074
特別推進費	14	特別研究費	17,150
特別推進費	7	特別研究費	7,004
特別推進費	5	特別研究費	23,070
特別推進費	227	特別研究費	176,585
特別推進費	15	特別研究費	585,453
特別推進費	1,830	特別研究費	6,624,528
計	21	384,446	

注 研究費補助金による収入を示す。

名古屋大学がめざすもの



名古屋大学学術憲章

名古屋大学は、学問の府として、大学固有の役割とその歴史的、社会的使命を確認し、その学術活動の基本理念をここに定める。

名古屋大学は、自由闊達な学風の下、人間と社会と自然に関する研究と教育を通じて、人々の幸福に貢献することを、その使命とする。とりわけ、人間性と科学の調和的發展を目指し、人文科学、社会科学、自然科学とともに視野に入れた高度な研究と教育を実践する。このために、以下の基本目標および基本方針に基づく諸施策を実施し、基幹的総合大学としての責務を持続的に果たす。

1. 研究と教育の基本目標

- (1) 名古屋大学は、創造的な研究活動によって真理を探究し、世界屈指の知的成果を産み出す。
- (2) 名古屋大学は、自覚性を重視する教育実践によって、論理的思考力と想像力に富んだ真気ある知識人を育てる。

2. 社会的貢献の基本目標

- (1) 名古屋大学は、先端的な学術研究と、国内外で指導的役割を果たしうる人材の養成とを通じて、人類の福祉と文化の発展ならびに世界の産業に貢献する。
- (2) 名古屋大学は、その立地する地域社会の特性を生かし、多面的な学術研究活動を通して地域の発展に貢献する。
- (3) 名古屋大学は、国際的な学術連携および留学生教育を進め、世界とつなぐアジア諸国との交流に貢献する。

3. 研究教育体制の基本方針

- (1) 名古屋大学は、人文と社会と自然の諸現象を俯瞰的立場から研究し、現代の諸課題に応え、人間性に立脚した新しい価値観や知識体系を創出するための研究体制を整備し、充実させる。
- (2) 名古屋大学は、世界の知的伝統の中で培われた知的資産を正しく継承し発展させる教育体制を整備し、高度で革新的な教育活動を推進する。
- (3) 名古屋大学は、活発な情報発信と人的交流、および国内外の諸機関との連携によって学術文化の国際的拠点を形成する。

4. 大学運営の基本方針

- (1) 名古屋大学は、構成員の自律性と自覚性に基づく探究を常に支援し、学問研究の自由を保障する。
- (2) 名古屋大学は、構成員が、研究と教育に関わる理念と目標および運営原則の策定や実現に、それぞれの立場から参画することを求める。
- (3) 名古屋大学は、構成員の研究活動、教育実践ならびに管理運営に関して、主体的に点検と評価を進めるとともに、他者からの批判的評価を積極的に行い、開かれた大学を目指す。

名古屋大学は、2000年(平成12)に「名古屋大学学術憲章」を全国に先駆けて制定し、「自由闊達」で国際性に富んだ学風の下、知と創造の拠点として、世界水準の卓越した研究成果を上げるとともに、「真気ある知識人」を広く社会に送り出すことを目標に掲げています。

産業への貢献—産学官連携の推進—



赤崎記念研究館（2006年竣工）



インキュベーション施設（2002年竣工）

ここでは、産学官連携推進本部が置かれています。

青色発光ダイオードを発明開発した、赤崎勇特別教授の業績を顕彰するとともに、本学における独自の先端的な科学技術研究を推進し、広く社会に貢献するために建設されました。隣接するインキュベーション施設およびベンチャー・ビジネス・ラボラトリーとともに、本学の産学官連携ゾーンを形成しています。



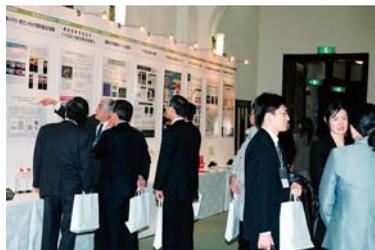
テクノフェア2008



ベンチャー・ビジネス・ラボラトリーのクリーンルーム



第3回予防早期医療創成プロジェクトシンポジウム
(2009年)



第4回名古屋大学東京フォーラム
(2006年)

名古屋大学と社会連携



第1回名古屋大学ホームカミングデー(2005)



トヨタ自動車によるF1カーの展示
(第1回ホームカミングデー 2005)



本のリユース市
(第4回ホームカミングデー 2008)



博物館「ミクロの探検隊」



大学文書資料室「豊田講堂のあゆみ」
(豊田講堂改修竣工式)



名古屋大学全学同窓会設立総会(2003)



災害対策室の中越沖地震への支援活動
に対する感謝状贈呈式



「古紙・紙ごみ再資源化システム」スタート
(2000)



「名チャリ」プロジェクト

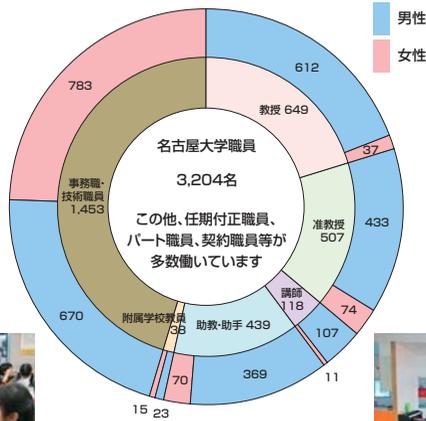


下宿用品リユース市

働きやすい職場をめざして

名古屋大学には3,200人以上が働いています。

職員のうちわけ(内円)とそれぞれの男女比(外円)



※平成21年5月1日現在

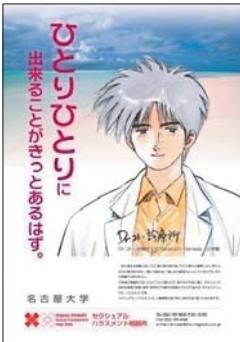


こすもす保育園児の博物館見学

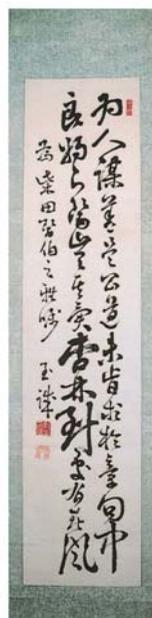
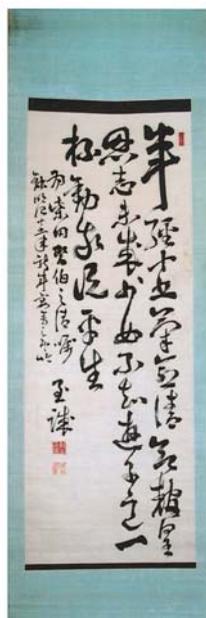


学童保育所ポピンズアフタースクール

名古屋大学は、国立大学の中で女性教員の割合が最も高い大学です。それでも11%余りと、まだ低い数字です。名古屋大学では、男女共同参画室を設置し、「女性教員比率向上のためのポジティブ・アクション」を教育研究評議会で決定するなど、さまざまな取り組みをおこなっています。「こすもす保育園」や日本の大学で初めての学童保育所「ポピンズアフタースクール」の設置もその例です。



地位を利用した教育の場や職場における嫌がらせ(アカデミックハラスメントやパワーハラスメント)や性的嫌がらせ(セクシュアルハラスメント)は人格や人権の侵害であり、民主的な教育・研究・労働環境とは相容れないものです。名古屋大学では、講習などによってハラスメント発生を未然に防ぐ対策を講じつつ、被害者の意向やプライバシーに配慮した相談体制を充実して問題解決をはかっています。



後藤新平自筆書掛軸 (複製)

原物所蔵：柴田光子氏 (左) / 柴田義守氏 (右)

愛知医学校長時代 (1881~83) の後藤新平が自ら揮毫して、同校の教員であった柴田邵平に贈ったものです。

後藤新平 (1857-1929) は、近代日本を代表する官僚・政治家の一人ですが、そのキャリアは愛知医学校からはじまりました。1876年 (明治9) に就職し、その後24歳で校長兼病院長となった後藤は、さまざまな改革を断行して、医学校発展の基礎を確立しました。「板垣死すとも自由は死せず」で有名な、岐阜の自由党総理板垣退助遭難事件で、後藤院長が治療に駆けつけたのもこの頃のことです。

この書を贈られた柴田 邵平 (1825-1898) は、尾張国で育ち、京都や江戸で西洋医学を学んだ後、1873年 (明治6) に愛知県仮病院の当直医となり、翌年には医学校創立係に任命されて、医学校の草創に深く関わりました。その後も教員として若き後藤校長を支えています。左の書の奥書きには、「明治十五年」の「新年宴会」で後藤が柴田のために即興で詠んだものを献じたとあり、二人の親密さがうかがえます。

近年、邵平の曾孫にあたる柴田義守氏から約1千点の関係資料が名古屋大学大学文書資料室に寄贈され、一般公開されています。

為人謀善是公道 未肯求於章句中
良将良医豈其異 杏林到处有花風

人の為に善を謀るは是れ公道、未だ肯て章句の中に求めず、
良将良医豈に其れ異ならんや、杏林到处に花風あり。

為柴田医伯之雅嘱 至誠 印 (新平印信) 印

柴田医伯の雅嘱の為にす

※掛軸の裏書に「通信大臣後藤新平男ノ書」とあることから、後藤が通信大臣の時代 (一九〇八—一三年にかけて) に書を掛軸にしたものと推測されます。

年経十五氣愈清 欲報皇
恩志未成 少女不知遊子意 一
杯勸我説平生

年経ること十五、氣愈々清し、皇恩に報いんと欲すれども
志未だ成らず、少女知らず遊子の意、一杯我に勧め平生を説く。

為柴田医伯之清嘱

献明治十五年新年宴会之即吟 至誠 印 (新平印信) 印

柴田医伯の清嘱の為に明治十五年新年宴会の即吟を献ず



展示ケース 1



展示ケース 2

名大史の教育・研究資料

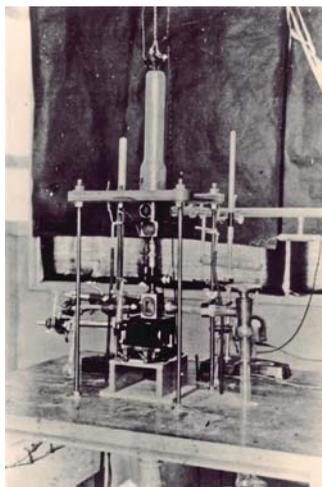
気体電子回折装置

上田良二(電子回折)

固体電子回折の専門家である上田は1942年(昭和17)に名古屋帝国大学に着任しています。1943年に着任した森野米三の立体化学の研究ために気体電子回折装置を4台自作し、提供しました。展示品は気体電子回折装置の一部分です。右の写真は一号機のものでされています。

上田はその後、超高圧電子顕微鏡の研究・開発をリードしました。また名古屋大学の工作室の充実にも努めました。

*常設展示の「電子回折装置」もご覧ください。





展示ケース 3

名大史の教育・研究資料

Langカメラ X線回折顕微装置

加藤範夫(X線回折)

展示品は加藤がハーバード大学でLang博士と開発したX線回折計の原型です。加藤は1946年(昭和21)に理学部助手になり、1961年に工学部教授に昇任しています。この間、1957年にハーバード大学のリサーチフェローになっています。この装置は古いスペクトロメーターにLangカメラ用の試料台を後から取り付けています。残念ながらフィルムカセットは残っていません。この装置により世界で初めて、X線におけるベンデル干渉縞が観測されました。X線回折とはX線で物質の構造解析、物質の特徴の成因を解明する学問です。ベンゲル干渉縞とは結晶の欠陥がなくなり完全性が高くなった際に観測されるX線による干渉効果です。この装置は加藤と共に名古屋に持ち帰られました。加藤はその後、名古屋大学に超強力X線発生装置を導入するなどX線回折研究をリードしました。



展示ケース 4

名大史の教育・研究資料

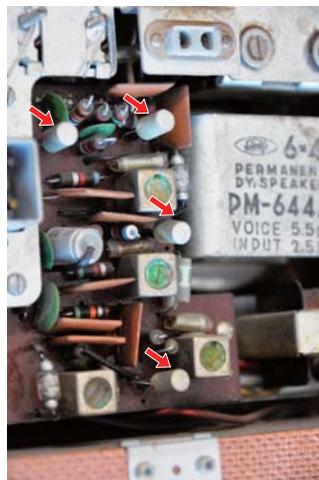
トランジスタ 有住徹弥(半導体)

神戸工業の有住チームにより国産トランジスタを使ったラジオが発表されたのは1954年(昭和29)1月です。

(ソニーがトランジスタラジオの試作こじりかかったのは1954年6月)

その後、有住は電子工学科の教授として1959年に名古屋大学に着任しました。有住にスカウトされた赤崎 勇は後年、青色発光ダイオードを創出します。「先生の研究、教育の基本姿勢は、常に基礎現象を学理的に追求し、深い理解に基づいてそれを応用にまで展開するということである。」と赤崎は有住の想い出を語っています。

展示品は1958年頃の神戸工業製トランジスタ4本(矢印)を使ったラジオです。(ケース、スピーカー等はシャーペン製を利用しています)1959年9月の伊勢湾台風のさい、「停電でニュースの聞けなかった夜半に、このトランジスタラジオのおかげで住宅の皆さんはニュースを聞くことができました」と文江夫人は当時を振り返っています。





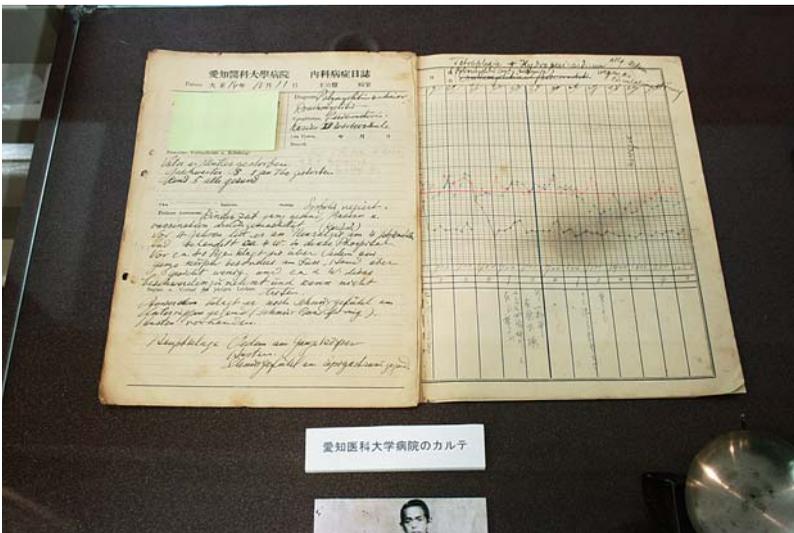
展示ケース 5-①

伊藤圭介編『錦窠植物図説』第87巻(附属図書館蔵)

名古屋大学附属図書館が所蔵する144冊の『錦窠植物図説』の一つで、「ヒトツバダゴ譜」と題され、日本では東海地方と対馬にしか自生しないヒトツバダゴ(一つ葉田子) *Chionanthus retusus* Lindley et Paxton, 1853についての情報が冊子としてまとめられている(圭介は「ヒトツバダゴ」と表記)。綴じこまれている写生図(パネル)は圭介が描いたものではないと思われる。展示されているページは、おそらく圭介自身の手になる印葉で、圭介の筆跡で「栗本より来ルヒトツバダゴ」と添えられている。「栗本」とは、栗本鋤雲(じょうん)のことで、医学や本草学を修め、幕末には外国奉行や函館奉行を務め、明治維新後は報知新聞主筆。自宅の庭のヒトツバダゴの花が咲いたので送るとの栗本の手紙(詩箋に朱筆でしたためられている、パネル)や、鋤雲の質問に答えて実などについて考察した圭介による返信の控えも、この「ヒトツバダゴ譜」に貼りこまれている。



展示ケース 8-①



展示ケース 8-②



展示ケース 8-③



展示ケース 8-④



展示ケース 9-①



展示ケース 9-②



貼りパネル（留学生総代式辞）



奈良坂源一郎(2列目中央)と中華民國の留学生たち

奈良坂の花甲(60歳)を祝って、留学生たちが酒宴を開きました。この時、上の感謝状とともに写真に写っている屏風が贈呈されました。奈良坂の右下が総代の林世偉です。



展示ケース 10-①



展示ケース 10-②



展示ケース 11



展示ケース 12



展示ケース 13



展示ケース 14

ケース展示等一覧

展示ケース 番号等	展示品名 (題目) 等	説明文等
専用展示台	後藤新平白筆書掛軸〔複製〕1882年(明治15) 原物＝柴田光子氏所蔵	
専用展示台	後藤新平白筆書掛軸〔複製〕年不詳 原物＝柴田義守氏所蔵	
1	ヒクイドリ骨格標本 博物館所蔵	名大史の教育・研究資料 実物標本 ヒクイドリ骨格標本 名古屋医科大学(1936年)
2	気体電子回折装置 上田良二(電子回折) 博物館所蔵	
3	ラングカメラ X線回折顕微装置 加藤龍夫(X線回折) 博物館所蔵	
4	トランジスタ 有住徹弥(半導体) 博物館所蔵	
5-①	伊藤圭介編『錦裳植物図説』第87巻 附風図書館所蔵	
5-②	ヒトツバタゴの写生図〔ボードへの印刷〕	展示中の図説の別のページに綴じ込まれており、『伊藤圭介』印がおさかれています。事故から見圭介自身の作ではなさそうです。
5-③	栗本御雲にあてた伊藤圭介の手紙(下書き)	
5-④	栗本御雲から伊藤圭介への手紙	書箋に主筆でしたためられています。
6	『老烈氏講義 皮膚病論一斑』1880年(明治13)	1879年6月4日から13日まで行われた、時間割表に載っていない、お雇い外国人ローレルの短期集中講義の講義録です。
6	山田良淳「建言」1880年(明治13)	愛知病院種痘係の山田良淳が、種痘(天然痘の予防接種)が普及しないことの原因を種痘技術の不足にあるとうったえ、それを改善すべきことを求めた意見書です。種痘の普及は、西洋医療の普及をめざした当時の日本の衛生行政における、最も大きな事業の一つでした。

6	『医事新報』第14号 1880年(明治13)	ローレツの指導で、愛知県公立医学校により1878年に創刊された学術雑誌です。当初は月1回、のちに月2回のペースで刊行されました。名古屋大学史上最初の定期刊行物です。
6	「(愛知) 医科大学陞格祝賀」絵はかき	加藤藤五郎は、愛知医専卒業後は政治家を志し、名古屋市会議員、愛知県会議員をへて、1924年(大正13)に衆議院議員に初当選しました。以後、当選12回、通算30年間もその職にあり、戦後は法務大臣や衆議院議長を歴任しました。1944年(昭和19)には、名古屋帝国大学医学部から博士号を取得しています。愛知医科大学の官立移管や、名古屋帝国大学の設立にも尽力しました。
7-①	愛知県立医学専門学校卒業証書〔複製〕1905年(明治38) 加藤延夫氏所蔵(愛知県公文書館寄託)	
7-②	奈良坂源一郎在職25年記念式典(県会議事堂)招待状〔複製〕1906年(明治39) 博物館所蔵	奈良坂源一郎は、東京大学医学部を卒業した1881年に愛知医学校へ赴任、以後40年間にわたって、熊谷幸之輔(1883～1916年の校長)とともに、愛知医学校、愛知県立医学専門学校を支え、生涯を捧げた解剖学教育のほか、1891年に愛知教育博物館を設立するなど地域の自然科学教育にも尽力しました。近年、孫にあたる奈良坂宏氏から、源一郎が残した貴重な資料が名古屋大学博物館に寄贈されました。
7-②	医学校創立係申付書〔複製〕1873年(明治7)	1873年(明治7)年3月、柴田邵平ら愛知県仮病院の医員数名が医学校創立係を命じられました。
7-②	柴田邵平愛知医学校一等助教諭任命書〔複製〕1881年(明治14)	
8-①	聴力検査機器(名古屋医科大学)博物館所蔵	
8-②	愛知医科大学附属医院のカルテ 博物館所蔵	
8-③	愛知県病院副教師足立盛至が使用していた伝わる天秤 博物館所蔵	足立盛至(1836～1896)は鹿児島県士族で、鹿児島医学校の教師をしていました。1873年(明治6)5月に愛知県仮病院が西本願寺掛所で再興された時、お雇い外国人ヨンクハンスとともに教員として迎えられました。当時の記録によると、一時は「病院事務総托」を兼務しており、病院の指導的な地位にあつたと推測されます。また足立は、毎月10円を病院に寄附し、それが100円に達したとして、内務省から銀盃を賞与されています。そして1876年4月、任期が満了した足立は、ヨンクハンスとともに病院を去りました。この天秤は、盛至の管係にあたる足立葉一氏から、名古屋大学博物館に寄贈されたものです。

8-④	足立盛至の写真 (1872年、名古屋に赴任する前年) 足立家所蔵	
9-①	愛知県立医学学校解剖局の顕微鏡 博物館所蔵	
9-②	愛知県立医学専門学校のミクロトーム 1910年(明治43)頃 博物館所蔵	ミクロトームは、プレパラートを作成するため、観察試料を極薄かつ均一の切片とする器具です。
貼りパネル	式辞 (在愛知県立医学専門学校中華民国留学生総代林世緯) [複製] 博物館所蔵	
10-①	名古屋帝国大学・名古屋医科大学の学印 [複製]	いずれも原物は石製です。「名古屋帝国大学之印」は、印材に亀裂が入ったため、たこ糸を巻いて補強されています。もう1つの「名古屋医科大学之印」は、印材の厚みがわずかしかなく、印面裏側には鉋で切断したような痕跡が見られます。名医大の学印の印面を切り落とし、あとの印材を再利用したものと思われます。
10-①	『名古屋帝国大学一覽』 1942年(昭和17)	
10-①	名古屋帝国大学医学部学生の講義ノート (齋藤眞教授の外科学) 1940年(昭和15)	
10-①	「開学式に関する記録書」	1943年に挙行された、開学記念式典の関係文書が綴じられたものです。
10-②	名古屋帝国大学博士学位記 1939年(昭和14)	
11	名古屋帝国大学開学記念絵はがき 1943年(昭和18)	カラーの絵図(「完成後の名古屋帝国大学」)は、当時実際に立案されていた東山キャンパスの構想が描かれています。5枚1セットを包んだ紙の裏には、当時の東山キャンパスの地図が描かれています(第2コーナーの展示パネル参照)。
11	淡沢元治総長『我等の学園』[複製] 1943年(昭和18)	当時の「総長懇談会」(第2コーナーの展示パネル参照)に使うため、淡沢総長が話す内容をまとめた小冊子です。本展示会場内において、ハンズオンで中身を閲覧できるようにしています。
11	『名古屋帝国大学概況』 1942年(昭和17)	

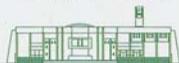
11	『名古屋帝国大学創立概要』 1943年(昭和18)	
12	新制大学院の設置認可申請書	
12	新制名古屋大学の設置認可申請書 1948年(昭和23)	岐阜農林専門学校を基礎にして農学部を新設する構想がありましたが、それが断念を余儀なくされたため、1949年の新制名古屋大学のスタートには間に合わず、実際に農学部が設置されたのは1951年でした。
12	庶務課「連合軍指令綴」1946年(昭和21)	
12	庶務課「連合軍最高司令部発 没収図書指令綴」1946年(昭和21)	
13	教養部授業時間制(1956年度前期、文科系1年、第1期)	
13	『名古屋大学附属図書館案内』1955年(昭和30)	
13	『学生便覧』1956年(昭和31)	当時、キャンパスが分散していたことから、キャンパス間にスクールバスが走っていました。
13	名古屋大学管弦楽団 第九回定期演奏会 ピラ 1958年(昭和33)	
13	第4回医学祭 ピラ 1960年(昭和35)	
13	『名古屋大学学祭』のパンプレット 1957年(昭和32)	この年、開学記念祭を大学祭と改称して開催されました。「名大祭」となつたのは1960年のことです。
14	『名古屋大学新聞』号外 1959年10月2日付(伊勢湾台風) 災害救援特集	
14	(文) 学部長選挙学生模擬投票用紙	
14	『名大協組ニュース』第43号 1958年(昭和33)	
14	大学院自治会『自治会報』第1号1962年(昭和37)	

14	日米安全保障条約改定反対デモ（全学自治会連絡協議会／名大祭実行委員会）1960年（昭和35）	
14	ゼネスト支持を呼びかけるデモ（名大音楽サークル協議会）1960年（昭和35）	
14	大学院生の待遇・環境改善の要請文（大学院自治会連絡協議会／大学院自治会連絡協議会奨学金問題小委員会）1962年（昭和37）	

※ 「展示番号等」の数字は、本稿掲載の写真と対応している。
 ※ 「複製」等と但し書きがないものは、全て原物を展示した。
 ※ 所蔵者の明記がないものは、全て大学文書資料室所蔵。
 ※ 展示ケース8-③の天秤は、昭和戦前期の製作によるものとの説が有力となり、現在確認中である。



2009年名古屋大学は
創立70周年(創基138周年)を記念します



— 名古屋大学創立70周年記念 —
(創基138周年)

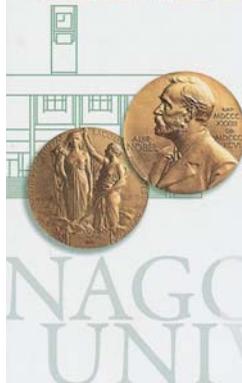
医学教育の曙から ノーベル賞まで

2009年10月17日(土)～12月26日(土)

場所：名古屋大学博物館 主催：名古屋大学博物館
名古屋大学文学書資料室
時間：午前10時～午後4時 休館日：日曜日・月曜日 入場無料
(入館は午後3時まで)

地下鉄名城線「名古屋大学駅」2番出口から歩いて2分(駐車場はありませんので、公共交通機関をご利用ください。)

お問い合わせ 名古屋大学博物館 〒464-8601 名古屋南千種区千種
Tel: 052-789-6767 Fax: 052-789-6898 URL: <http://www.num.nagoya-u.ac.jp/>



名古屋大学創設100周年記念
学校沿革史は語る
近代日本の中等学校と名古屋大学の誕生
< 会期 >
10月28日～30日 9:30～17:00
(日曜・祝日は閉館)

— 名古屋大学創立70周年記念 —

医学教育の曙からノーベル賞まで

名古屋大学は、今年で創立70周年・創基138周年をむかえました。名古屋帝国大学として1939（昭和14）年に創立されてから70年、医学部の前身にあたる名古屋豊彦病院・仮医学校が1871（明治4）年に設置されてから138年です。これを記念する今回の展示では、明治維新後の西洋医学を普及する事業の東海地方における中心となった創基の時代から、あいついで関係者がノーベル賞を受賞した現在までの歴史を、写真/パネルや実物資料（一部はレプリカ）などを使って分かりやすく観覧します。とくに創基の時代については、初公開の貴重な史料を多く展示します。また、本学の研究・教育・キャンパスライフの現状にもふれます。激動の時代に創基・創立され、現在の地位を築くに至った名古屋大学の歴史と現状を、ぜひ展示会場で体感してみてください。



①おもな内容> ※展示内容や展示日は変更されることがあります。
※名古屋大学の歴史に関する資料をお持ちの方は、ぜひ下記にご一報ください。

①キャンパスライフ

歴史地図や年表を眺め、映像を視聴し、ハンズオン資料を手にとって、誰でも気軽に体感できる名古屋大学創基138年の歴史と現在の姿。

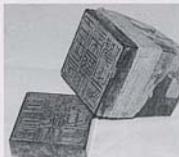
【主な展示物】伊藤圭介植物図説、スライドショー（名大キャンパスの歴史）、「名大Who's who」（著名人のプロフィール）、部・サークル自己紹介、など。



②21世紀にはばたく名古屋大学—教育と研究の現状

【先端研究】「国際化」「法人化」「大学院大学」「持続可能な社会」「自由闊達」「勇気ある知識人」などのキーワードによって語る、現在と未来の名大。

【主な展示物】名大公式紹介DVDの上映、など。



③源流（創基）—「河の病院」から鶴舞へ

西洋医学教育の中核をにぎ、「河の病院」として住民からも親しまれた天王崎時代から、現在の鶴舞キャンパスに移転して医科大学へと発展した、名大医学部の前身学校の歴史。

【主な展示物】後藤新平自筆書掛軸、愛知医科大学教員柴田部平・奈良坂源一郎・部立盛至の関係史料、愛知医専卒業証書、ヒコイドリ得格標本、など。



④創立—「名帝大けい誕生」

東海、愛知、名古屋に総合大学を、との人びとの長年の念願がかなって誕生した最後の帝国大学。しかし、時まさに戦争の時代にあった、その苦難の軌跡。

【主な展示物】当時の公印、開学記念絵はがき、初代総長泷沢元治「我等の学業」、医学部学生の講義ノート、創立期名帝大発行の小冊子類、気体電子回折装置（一部）、など。

⑤新制名古屋大学の出発

敗戦後の混乱のなか、1949（昭和24）年に新制大学として再出発した名古屋大学のあゆみ。とくに1960年前後を中心とする学生生活にスポット。

【主な展示物】敗戦直後の名大行政文書、1960年前後の学生生活を物語る資料、豊田講堂建設記念ブックエンド、名大病院パンフレットの愛護（ハンズオン）、有住教授のトランジスタラジオ、ラジカマのプロトタイプ、など。

⑥名古屋大学の発展

東海地方のみならず、日本の基幹大学として発展をつづけた時代。懐かしい写真などとともふりかえる、1970年代から1990年代の名古屋大学。

博物館特別講演会

- 第1回 10月24日（ホームカミングデイ当日）午後1時～2時30分
羽賀 祥二（名古屋大学文学部資料系）「名古屋大学の歴史を語る」
- 第2回 11月12日（土）午後3時～4時30分
高橋 昭（名古屋大学名誉教授）「名古屋大学医学部の揺籃期」
- 第3回 11月26日（土）午後3時～4時30分
堀田慎一郎（名古屋大学文学部資料系）「名古屋帝国大学の創立と新制名古屋大学の出発」
- 第4回 12月10日（土）午後3時～4時30分
杉山 寛行（名古屋大学理事・副総長）「名古屋大学の教育・研究の現状」

お問い合わせ：名古屋大学博物館 ▶ Tel: 052-789-5767 Fax: 052-789-5896
 大学文書資料室 ▶ Tel: 052-789-2046 Fax: 052-789-6222
 〒464-8601 名古屋市中千種区不老町 URL: <http://www.num.nagoya-u.ac.jp/>



注

- (1) 大学文書資料室の展示活動について詳しくは、拙稿「大学アーカイブズの展示活動とその諸問題―名古屋大学における「八高展」を事例に―」（『名古屋大学文書資料室紀要』第一七号、二〇〇九年三月）を参照。
- (2) 大学アーカイブズが、当該大学の歴史展示にどのように関わるのかといった問題については、前掲、拙稿「大学アーカイブズの展示活動とその諸問題」で論じた。
- (3) 豊田講堂の沿革や名古屋大学の歴史における位置づけ、二〇〇七年竣工の改修・増築工事の概要などについては、山口拓史・堀田慎一郎共著『豊田講堂―Toyoda Auditorium―』（名大史ブックレット9、名古屋大学文書資料室、二〇一〇年、増補版）を参照。
- (4) この措置にあたっては、書庫を展示室に改修する工事だけではなく、書庫がなくなる分だけの資料保管スペースを、館外に確保しなければならなかった。そしてそのスペースには、大型機械が置かれていたため、これを撤去するためにも相当の費用がかかっている。
- (5) その後、山口室員が二〇〇九年三月末で退職（愛知医科大学に就職）したため、メンバーは三人となり、さらに同年九月一五日付けで西川館長が退職したため（東邦大学に就職）、代わりに博物館の蛭雑観順准教授が加わった。
- (6) 資料室は、記念式典当日に出席者全員に配布された記念図録（名古屋大学編刊『知と創造の拠点 名古屋大学の歴史』）の編集も担当した。この記念図録の編纂については、中元崇智『知と創造の拠点 名古屋大学の歴史（創立七〇周年記念図録）』の編纂―新出写真資料の紹介を中心に―（『名古屋大学文書資料室紀要』第一八号、二〇一〇年三月）を参照。
そのほか、いずれも創立七〇周年記念事業の一環として位置づけられた、愛知医学校・愛知病院記念碑の建立（二〇〇七年一〇月）、第一五回博物館企画展「伊吹おろしの若者たち―八高創立百年の歴史から―」（八高展）の実施（二〇〇八年一〇月―十一月）においても、大学文書資料室が中心的役割を果たした。八高展については、前掲、拙稿「大学アーカイブズの展示活動とその諸問題」、堀田慎一郎・山口拓史・羽賀祥二・西川輝昭「第一五回名古屋大学博物館企画展記録 伊吹おろしの若者たち

―八高創立百年の歴史から―（『名古屋大学博物館報告』第二四号、二〇〇八年二月）を参照。

(7) 第八高等学校については、すでに二〇〇八年にその歴史を特集した企画展を実施している（前掲、拙稿「大学アーカイブズの展示活動とその諸問題」、前掲「第二五回名古屋大学博物館企画展記録」）。名古屋高等商業学校の歴史展についても、二〇一〇年一月から二月にかけて、やはり博物館企画展として開催されることが決まっており、資料室もこれに共催者として参画することになっている。

(8) 前掲、『知と創造の拠点 名古屋大学の歴史』。

(9) 名古屋大学史編集委員会編『写真集 名古屋大学の歴史 一八七一〜一九九一』（名古屋大学、一九九一年）。

(10) 名古屋大学史編集委員会編『名古屋大学五十年史』通史一、同通史二（名古屋大学、一九九五年）。

(11) 資料室では、名古屋大学生協同組合が毎年刊行する『名古屋大学卒業アルバム』掲載の年表の作成を担当している。ただしこれも、ごく最近の年代は内容が充実しているものの、古い年代については項目数が少なく、全体としては不十分の感をまぬがない。

(12) なお、展示物の写真については、ケースに展示されているままを撮影したものと、本企画展終了後に、あらためて撮影したものが混在している。

(13) 柴田邵平（一八二五―一八九八）は、文政八年に尾張国に生まれ、当初は生国の漢方医に師事したが、やがて京都、のちに江戸で西洋（蘭方）医学を学び、維新後の一八七二（明治四）年には、かつて仕えていた美濃国今尾藩に英学教授として招聘された。七三年に名古屋大学医学部附属病院の源流にあたる名古屋県病院の当直医となり、名大史に登場する。その翌年には医学部創立係に任命され、本格的な西洋流医学部の創立を指導した。こうして創立された愛知医学部では一等助教諭に任じられ、当時校長であった若き後藤新平を支えた。八三年に退職し、八六年には熱田の避病院（伝染病隔離病院）医長に就任した。そのほかにも、日本や地域における、西洋医学・医療の発展に大きな役割を果たした。

柴田邵平関係資料は、柴田の蔵書を中心とした約九四〇点の資料群である。幕末から明治前期にかけて刊行された、医学・医療関係などのきわめて貴重な書籍や雑誌がそろっているほか、柴田の個人資料も含まれている。同資料は、二〇〇五年度に子孫

の柴田義守氏から資料室へ寄贈され、一般公開されている。目録データは、資料室のホームページの資料検索システムで検索できる。

(14) 『名大トビックス』第一六四号(二〇〇七年一月)。「名大トビックス」は名古屋大学の月刊広報誌であり、資料室はその裏表紙に「名大トビックス」を毎回連載し、すでに一〇〇回に近づいている。また、この連載を単行本にまとめた『ちよつと名大史』も、資料室から刊行されている。入手ご希望の方は資料室まで。

(15) レプリカ作成およびその展示にあたっては、掛軸所蔵者の柴田光子氏と柴田義守氏のご快諾をいただいた。ここにあらためて感謝の意を表したい。

(16) ただし、資料の劣化を防ぐ観点から、原物の閲覧をおことわりし、マイクロフィルムやコピーをご覧いただく場合もある(名古屋大学文学書資料室利用規程』第三条第二項第三号)。

(17) 資料室ではこうした観点から、名古屋大学(各部署を含む)が公費によって刊行・印刷した資料のうち重要なものを、その刊行の次年度にまとめて収集する業務をおこなっている。詳しくは、拙稿「大学アーカイブズと「大学資料」(刊行物資料)―名古屋大学における理論と実践―」(『名古屋大学文学書資料室紀要』第一四号、二〇〇六年三月)。

(18) ①および②は、資料室の開館時間内(平日の九時三〇分〜一六時三〇分)であれば、いつでも視聴できるようになっている。

(19) 一般には、名古屋大学のホームページから視聴可能。

(20) 本来は、インターネットサイトで一般公開しているものであるが、今回はオープンコースウェア委員会に依頼して、教員をさらにピックアップしたうえでDVDにまとめてもらった。

(21) 人物によって名古屋大学の歴史を紹介する数少ない試みの一つとして、拙著『名古屋大学 歴代総長略伝―名大をひきいた人物と―』(名大史ブックレット13、名古屋大学文学書資料室、二〇〇九年)がある。もともとこの場合は、取り上げる人物を歴代総長に限定している(前身諸学校の校長は一部の紹介にとどめたので選定したが)、人選は問題になりにくい。

(22) A4用紙一枚とはいえ、刊行物やインターネットの記述を鵜呑みにせず、厳密な調査により確実なデータを集め、膨大な事績から適切なものを選択して、限られた字数にまとめる作業は、想像以上に手間のかかるものである。写真についても、可能な限

り掲載許可をとった。また、ご本人が生きておられる場合は、とくに配慮が必要となる。

(23) この意図を、展示会場で説明しなかったため、人物の選定にご不満を感じられた方も少なくなかったと思われる、この点は反省しなければならぬ。ただ、これからの増補に向けて、この人物をぜひ取り上げるべきだといったご提言は、それを採用するかどうかは別に、むしろ大いに歓迎するところである。

(24) 全ての回のパンフレットをそろえるにあたっては、資料室所蔵のバックナンバーから洩れている回を、名大祭本部実行委員会のご協力によって補うことができた。

(25) 第一回／羽賀祥二「名古屋大学の歴史を語る」(二〇〇九年一〇月二四日(土)、一三時～一四時三〇分)、第二回／高橋昭(名古屋大学名誉教授)「名古屋大学医学部の播種期」(二〇一〇年一〇月二二日(木)、一五時～一六時三〇分)、第三回／堀田慎一郎「名古屋大学の誕生と草創期」(二〇一〇年十一月二六日(木)、一五時～一六時三〇分)、第四回／杉山寛行(名古屋大学理事・副総長)「名古屋大学の教育・研究の現状」(二〇一〇年十二月一〇日(木)、一五時～一六時三〇分)。会場は、いずれも名古屋大学博物館講義室。

(ほった・しんいちろう 大学文書資料室)